

アムール編目文土器の細別と展開

内田 和典

要旨

ロシア極東地域の新石器時代には、菱形の押捺文で構成されるアムール編目文土器を指標とする文化が、約 7900～6100BP 頃にアムール河下流域や沿海地域を中心に広域的に分布する。本論では、このアムール編目文土器を中心に型式学的な検討を行い、各地域間の時間的な併行関係を整理して、地域的展開を検討した。その結果、Ⅰ期：コンドンⅠ式とルドナヤ式、Ⅱ期：コンドンⅡ式とセルゲエフカ式、Ⅲ期：コンドンⅢ式とベトカ式に対比させた。Ⅰ期：コンドンⅠ式では楕歯文、ルドナヤ式では菱形等の型押文土器が主体となり、口縁端部周辺に文様を施文する段階から、口縁部付近に文様を広げて施文する段階へと移り変わる。楕歯文や型押文等の主文様や施文原則に違いはあるが、押捺施文技術を有している点は共通する。Ⅱ期：Ⅰ期よりも文様構成や器面調整技術等において多くの共通点を有する。型式細分の指標となるのが、帯状に横位展開する楕歯文と線状の楕歯文等による区画の存在である。Ⅲ期：コンドンⅢ式では型押文と楕歯文との組合せによって文様帯が構成されて、分帯化・多段化による区画がなされるが、ベトカ式ではセルゲエフカ式から文様帯配置の方法を受け継いでいる。

各期の展開について、サハリン島とアムール河中流域・三江平原を中心に検討を行ったが、サハリン島にはⅠ期にのみ型押文土器が分布するが、Ⅱ期以降はアムール編目文土器の分布圏には含まれない。アムール中流域はⅠ期の資料が存在せず、Ⅱ・Ⅲ期についても積極的な型式間の交渉関係を想定しにくい。三江平原については不明な点が多いが、遅くともⅢ期にはアムール編目文土器の分布圏に含まれる。今後の課題として、①アムール河中流域・嫩江流域を中心に分布する隆起線文土器とアムール編目文土器との併行関係、②Ⅲ期から中期新石器時代後半期への移行に関する問題を解決する必要がある。

1. はじめに

ロシア極東地域の新石器時代には、押捺された菱形の型押文で構成されるアムール編目文（амурская плечёнка）土器を指標とする文化が、約 7900～6100BP 頃にアムール河下流域や沿海地域を中心に広域的に分布する。オクラドニコフ（Окладников）A.П.によれば、アムール編目文土器とは、互いに絡み合う編目が漁網の目を形成し、漁撈民の生活から生み出されたものが広域に分布したものであるとされる（オクラドニコフ 1974）。

このアムール編目文土器を伴う文化は、ロシア極東のアムール河下流域ではコンドン（кондонская）文化やマルィシェボ（мальшевская）文化、沿海地域ではルドナヤ（руднинская）文化やベトカ（веткинская）文化、中国領のハンカ湖周辺では新開流文化として、時期や地域差を有したものと設定されている。これらは大貫静夫による「極東平底土器」（大貫 1992a）を細別した三段階の内の「前段階」に位置する「アムール編目文文化群」（大貫 2010）である。2000 年代以降、ロシア極東地域の考古学調査が進み、「アムール編目文文化群」とされた各文化の内容についても検討が進められ、地域的な文化変遷が明らかにな

り始めた（伊藤 2006；内田 2011b；Шевкомуд 2009；Батаршев 2009；福田 2013；Morisaki and Sato 2015；Морева 2005）。しかし、各地域の文化内での土器研究は進展しているものの、広域的な視点から各文化における土器属性の差異や共通性を見出し、地域間の動態を把握する試みは少ない。そのため本論では、ロシア極東地域のアムール河下流域と沿海地域に分布するアムール編目文土器を中心に型式学的な検討を行い、各地域間の時間的な併行関係を整理しながら、地域的展開を検討することにしたい¹⁾。

2. ロシア極東の新石器文化編年について

2-1. オクラドニコフ編年の再考

ロシア極東地域における新石器文化編年は、オクラドニコフ A.П.やチェレビヤンコ（Деревянко）A.П.らによって構築された（Окладников 1970；Окладников и Деревянко 1973）。アムール河下流域では、いわゆるオクラドニコフによる新石器時代編年が 1970 年代に設定され、前期：マルィシェボ文化、中期：コンドン文化、後期：ボズネセンスコエ（вознесенская）文化とされた。各期の文化には代表的な土器文様が設定されており、前期のマルィシェボ文化には帯状楕目文土器、中期のコンドン文化に

はアムール編目文土器、後期のボズネセンスコエ文化には渦巻文土器が伴うとされた。しかし、2000年代以降のロシア極東地域における土器型式学的研究の進展（伊藤 2006；内田 2011b、Шевкомуд2004；Морева2005；Батаршев2009 など）や年代学的検討（Kuzmin et al 1998・國木田他 2011 など）によって、オクラドニコフ編年への再検討が進められた。特に前期のマリシエボ文化と中期のコンドン文化の時間的な位置づけが問題となった。コンドン文化は、オクラドニコフによってコンドン（Кондон）遺跡やボズネセンスコエ（Вознесенское）多層遺跡の成果をもとに設定され（Окладников1983・1984）、その後チェレビヤンコがコンドン遺跡での年代測定値をもとにして、紀元前3千年紀前半に相当するとした（Деревянко1973）。オクラドニコフは、コンドン遺跡出土土器の文様や器形等の諸属性を分類し、さらにボズネセンスコエ遺跡（Окладников1972）の層位資料等をもとに新石器文化編年を提示したが（Окладников1970）、コンドン文化の基準となったコンドン遺跡資料には後期のボズネセンスコエ文化土器が混在することや、オクラドニコフによる考古学調査以降のアムール河下流域での発掘調査の進展により、前期のマリシエボ文化にもアムール編目文土器が伴うことがわかり始め、アムール河下流域の新石器文化編年の捉え方に矛盾が生じてきた。そのため、当地域の新石器時代編年は、前半期にアムール編目文土器、後半期に渦巻文土器を代表とする二時期案が長らく採用されてきた（大貫 1998；福田 2007）。大貫静

夫（1992a・b, 1998）は、前半期のアムール編目文土器を「極東」の新石器文化研究の視点から周辺地域の層位事例との対比を行いながら、コンドン文化のアムール編目文土器が前期のマリシエボ文化に先行することを指摘した。

ロシア側でもシェフコムード（Шевкомуд）И. Я. が、標識遺跡であるコンドン遺跡出土土器の再検討を行い、斜行櫛歯文と菱形型押文が口縁部及び体部上部に帯状展開するものや、櫛歯文のみが施文されるものなどをあらたに「前期コンドン文化」とし、型押文内部に「×」字形文や線状の櫛歯文などの装飾をもち数段の菱形型押文が密に施文されるものや、口縁部付近に斜行沈線文（いわゆる「溝彫文」（каннелюра）のこと）が帯状にめぐる土器で構成されるものを「後期コンドン文化」段階として細別した（Шевкомуд2003・2004）。さらにシェフコムードは、放射性炭素年代測定値の結果を加えて、アムール河下流域の中期新石器時代を前・後半に細分し、前半期をコンドン文化（前期・後期）、後半期をマリシエボ文化として三段階に分類した（Шевкомуд2005・2009）。コンドン文化がマリシエボ文化に先行することは、筆者らによるクニャゼボルコンスコエ（Князе-Волконское）1遺跡やマラヤガバニ（Малая Гавань）遺跡での調査における層位状況や放射性炭素年代測定値の結果からも支持された（福田他編 2011）。本論では筆者らを含めた日露国際共同調査によるアムール河下流域での調査成果を基にして議論を進めることにする。

時代	時期	アムール14C年代	スレドネアムールスカヤ低地帯(南西部)	アムール河口域(北東部)
新石器	前期	[12000]	オシポフカ	[ゴールムイス4?]
		[11000]		
		[10000]		
	中期	10000-8500	オシポフカ系?	?
		8500-8000	ヤミフタ	?
		8000-7600?	?	?
		7600?	コンドン古段階	マリンスコエ?
		[7400-7180]		
		-6500	コンドン新段階	?
	6500-6100			
	6100-5500	(コンドン/マリシエボ)?		
	5500-ca.5000	マリシエボ	ベリカチ	
-4700	(マリシエボ/ヴォズネセノフカ)?			
後期	4700-4300	ヴォズネセノフカ	ゴリン式	
	4300-4000		オレリ式・ウディリ式	
	4000-3700		マラヤガバニ式	
	3700-3400			
新石器時代晩期 新石器—古金属器移行期	[3400-3000]	?	ヴォズネセノフカ/コッピ	
	3000-2800	ウリル?	コッピ	
古金属器	前期	[2800-]	ウリル	?
		ca.2500		サルゴリ
		[2300-2000]		パリシヤブフタ
	後期	[2000-]	ウリル系	ポリツェ

※年代測定値は未較正。[]は先行研究による。

図1 アムール下流域における新石器時代～古金属器時代文化編年（福田 2018・表1を基に作成）

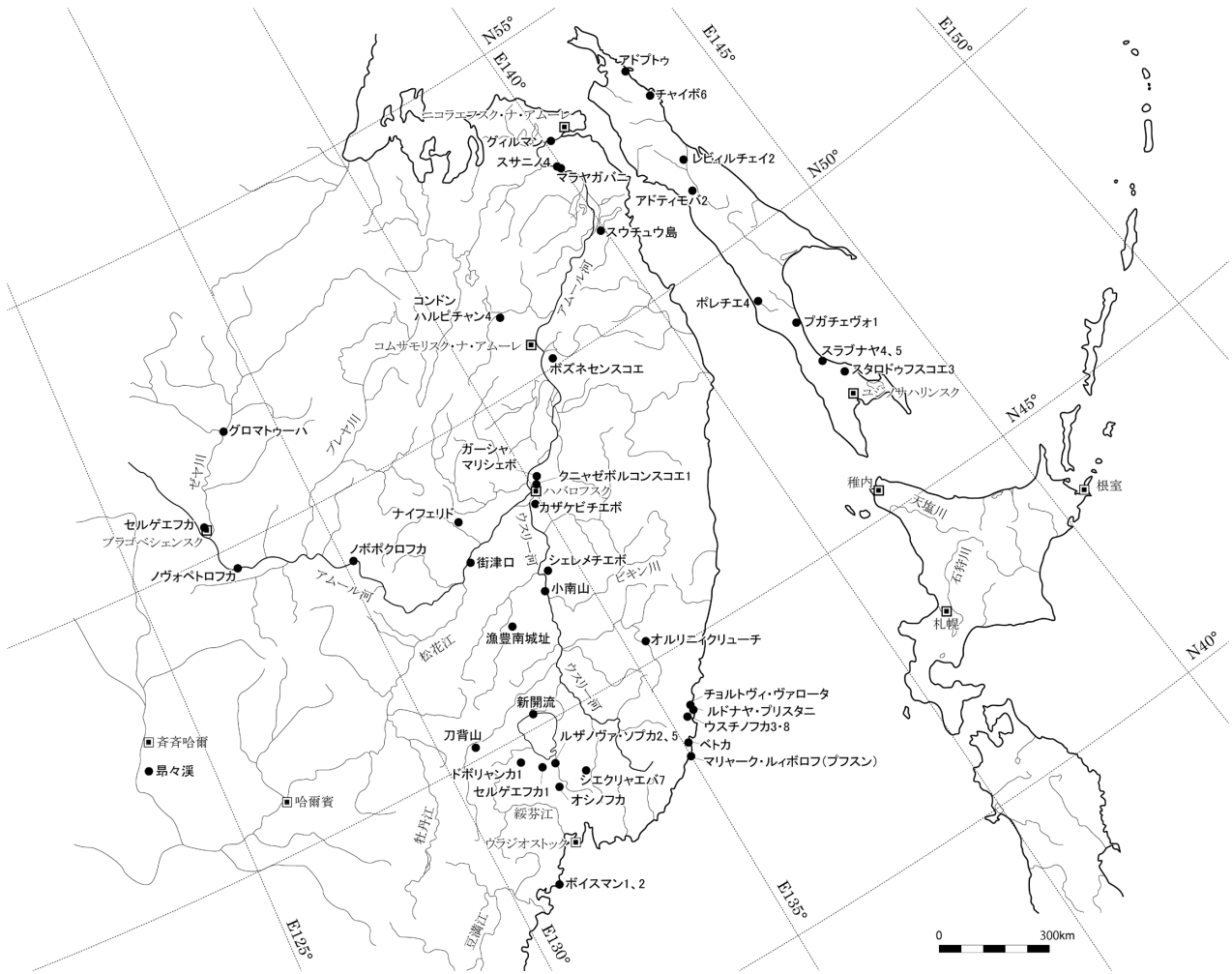


図2 ロシア極東地域の中期新石器文化前半期の主な遺跡位置

2-2. マリインスコエ (маринская) 文化

アムール河下流域における新石器文化編年の変遷状況は図1のようになる。このうち中期新石器時代のコンドン文化に並行する文化として、スウチュウ(Сучу)島遺跡出土資料を基にしたマリインスコエ文化が設定されている。この文化は、口縁部付近に櫛歯文をもつ鉢形の平底土器や石刃、細石刃、石刃鏃等の石器群を伴うものとして、設定当初はアムール河口部(北東部)地域を中心に分布するとされた(Деревянко и др 2002)。文化設定者の一人であるメドベージェフ(Медведев) V.E. は、オクラドニコフ編年を踏襲したアムール河下流域の新石器編年を想定しているため(Медведев 2005)、マリインスコエ文化と前期のマリシェボ文化との系統的つながりを想定している。近年では、アムール河下流域における新石器土器の胎土分析などを通じて、アムール河下流域南西部地域のカザケビチエボ(Казакевичево)遺跡でもマリインスコエ文化の櫛歯文土器が分布している(Цетлин и Медведев 2014・2017)。本文化の年代測定値はスウチュウ島で得られており、およそ8500～7000BPとなることから、分布範囲も広く、

長期に及ぶ文化のようである。

この櫛歯文土器の位置づけをめぐるのは、伊藤慎二がロシア極東地域の新石器文化編年を構築する中で、コンドン文化の時間的序列を考える際の指標としている(伊藤 2006・p.66)。伊藤はコンドン文化を細別するために、マリインスコエ文化とマリシェボ文化の櫛歯文土器の系統的關係を重視し、コンドン文化の時間的序列を想定した。この櫛歯文の系統的思考そのものはメドベージェフの考え方に近い。伊藤、メドベージェフ、筆者の三者による櫛歯文土器に関する考え方を対比してみると、伊藤はマリインスコエ文化をコンドン文化の一部と捉えており、メドベージェフはマリインスコエ文化とコンドン文化は別文化とし、マリインスコエ文化とマリシェボ文化との系統關係を重視する。筆者はマリインスコエ文化の櫛歯文はコンドン文化の範疇にあると考えている(内田 2011a・b)が、マリインスコエ文化とマリシェボ文化との櫛歯文土器との系統的關係は未だ不明確であるという立場をとる。現在のところマリインスコエ文化のみが単一出土する遺跡がアムール河下流域では確認されていないことや、メドベージェフらに

よるマリインスコエ文化の定義内容を既存資料に照らし合わせて抽出することが難しいことから、マリインスコエ文化の櫛歯文土器については資料の蓄積を待って検討すべきであろう。そのため本論では、櫛歯文土器については「マリインスコエ文化の櫛歯文土器」というような分類を行わずに、単に櫛歯文土器として扱うことにする²⁾。

3. アムール河下流域の土器型式学的検討

3-1. 土器型式学的研究と年代測定値

本論では、アムール河下流域と沿海地域を中心にして、周辺地域の同時代の遺跡を主な分析の対象として、アムール編目文土器の時間的な細別と各期におけるその展開を検討する(図2)。

アムール編目文土器の細別を行うために、シェフコムードによる「前期・後期コンドン文化」の分類を前提とする。この前提を基にアムール河下流域で筆者らが行ったクニャゼボルコンスコエ1遺跡とマラヤガバニ遺跡出土土器の内、特に出土資料の大半を占める型押文と櫛歯文を中心に検討を行う。両文様はアムール編目文土器の成立を考える上でも重要な文様要素である。そこで、最初にアムール編目文の型押文と櫛歯文の文様を有する土器の付着炭化物から得られた年代測定値をもとにして、各文様系統の時間的な位置づけを確認することにしたい。

本来的に土器の細別時期を論じるには、土器の型式学的研究のみで議論すべきであろう。しかし、ロシア極東地域では一般的に良好な層位資料に恵まれず、後世の人為的・自然的な擾乱によって様々な時期の資料が入り混じることが多く、考古資料の先後関係を捉える際の障壁となってしまう、一括資料の評価が難しいという側面がある。ロシア極東の考古資料を扱う際にこのような問題があるため、まずは土器付着炭化物による年代測定値によって、各文様系統の時間的な位置づけをおおよそであっても把握する必要がある。もちろん文様や器面調整などに特徴的な要素をもつ土器付着炭化物が都合よく採取できない場合もありえるが、時間的な並行関係を最大公約数的に把握することは可能であろう。時間的な位置づけを断片的にでも与えることによって土器型式間の検討を進めることが可能となる³⁾。

3-2. アムール編目文土器の年代測定値と段階変遷

図3は、型押文土器と櫛歯文土器に付着炭化物から得られた放射性炭素年代測定値を基にして、型押文と櫛歯文土器の段階変遷を示したものである。これらの土器については、層位的コンテクストに基づいた

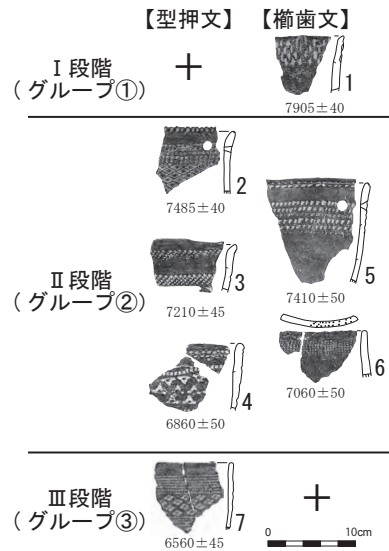


図3 クニャゼボルコンスコエ1遺跡(2006年)とマラヤガバニ遺跡(2007・2008年)出土土器の段階変遷と年代測定値

放射性炭素年代測定値が得られており、國木田大らにより年代測定値別に3つのグループに分けられている(國木田他2011)。國木田らは、層位的コンテクストが明確な木炭と土器付着炭化物の年代差をもとに、土器付着物の受ける海洋・淡水リザーバー効果を約400BPと仮定して年代測定値を算出した。その結果コンドン文化は、①約7600BP、②6900～6500BP、③約6200BPの3つの時期的なまとまりを得ている(國木田他2011)。

次に國木田らが付着炭化物を採取した土器の型式学的特徴についてグループ①～③の内容に沿って確認する。クニャゼボルコンスコエ1遺跡及びマラヤガバニ遺跡では、年代値を伴ったグループ①に相当する型押文土器は良好な資料が不在であったため分析されていないが、クニャゼボルコンスコエ1遺跡IIc文化層を中心に櫛歯文土器の年代測定値が得られている。図3-1は7905 ± 40BPであり、口縁部直下に斜行する4単位の楕円形状の櫛歯文を押捺し带状に展開させている⁴⁾。口縁部の形態は直立するがやや外側に開き、端部の断面形状は外面側から内面側に向かって傾いている。

グループ②は、口縁部及び体部上半部を中心に型押文と櫛歯文を押捺施文して带状の文様帯を構成する土器が中心となる。型押文と櫛歯文で構成される土器についてはいくつかのバリエーションが存在する。図3-2は、直立する口縁部形態を有し、端部が外側に開く土器である。口縁端部に刺突文をもち、口縁部付近には型押文と櫛歯文が带状に展開する。櫛歯文は2段3単位で菱形型押文の上端部に施文されている。破片資料であるため全容は分からないが、おそらく下端

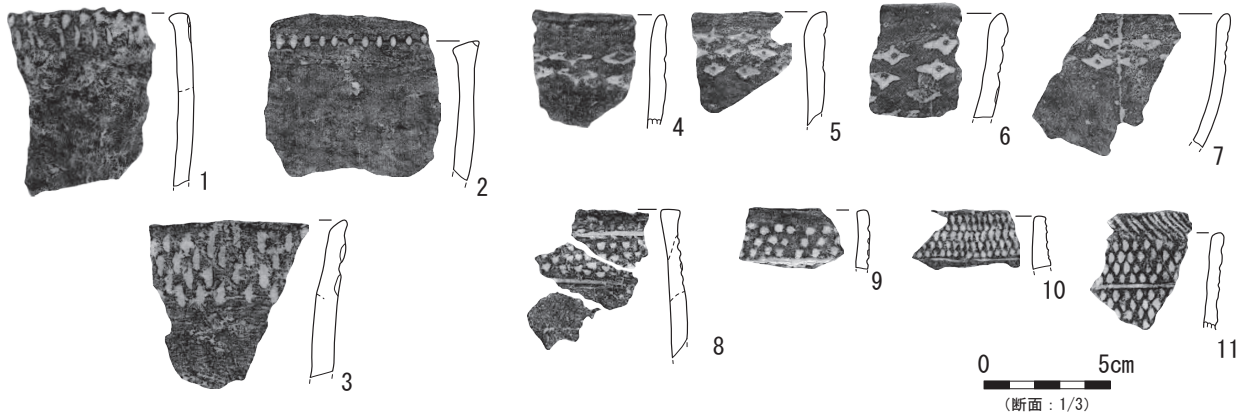


図4 コンドンⅠ式

部にも櫛歯文が帯状に施文されているものと考えられる。菱形型押文は密に施文され、内部に点状文がある。図3-3は、口縁端部を外側に屈曲させる深鉢であり、6単位の櫛歯文が口縁部付近に帯状展開する。破片資料のためわずかにしか確認できないが、櫛歯文下部に菱形型押文が施文されている。図3-4は1～2条の櫛歯文を横位展開させている。口縁部は直立し、端部は丸く整形された深鉢である。口縁部には、2単位の櫛歯文が横位に展開し、体部上半部には線状の櫛歯文が一条めぐる。線状の櫛歯文は区画の役割を果たし、櫛歯文間には三角形型押文が三段に押捺施文され、最上段の一行は逆三角形となる。この型押文内部にも点状文が施文される。

図3-5は、やや外側に開く口縁部形態となる深鉢である。口縁端部及び口縁部付近の施文間隔が粗で、やや大振りの櫛歯文が横位展開する。図3-6は、口縁部がやや内傾する深鉢であり、口縁部付近に7単位の櫛歯文が帯状展開し、口縁端部には3単位の櫛歯文が斜行状に施文されている。

グループ③では櫛歯文土器の分析資料が不在であり分析されていない。図3-7は、マラヤガバニ遺跡(2008年)出土資料であり、直立する口縁部はやや外側に開き、端部は丸みを帯びる深鉢である。菱形文の内部には「×」字状装飾があり、菱形型押文の上下部にはそれぞれ7条、4条の櫛歯文が線状に施文されている。

グループ①～③における土器の特徴とシェフコムード(2009)の分類枠を参照にすると、①・②が前期コンドン文化、③が後期コンドン文化となる。内田2011a・bと対比させると、①がKnV1式、②がKnV2式、③がKnV3式となる。おおよそ時間的な変遷としてⅠ～Ⅲ段階に区分することが可能である。

3-3. アムール河下流域のコンドン式土器の分類(図4～7)

コンドン式土器は、クニャゼボルコンスコエ1遺跡

とマラヤガバニ遺跡出土資料を中心に分類を行う。基本的な分類の枠組みは内田2011a・bを基本としている。

コンドン式土器の変遷を文様帯の変化から説明すると次のようになる。コンドンⅠ式は口縁部付近を中心に文様帯をもち、コンドンⅡ式では口縁部と体部上半部に文様帯が分かれ、さらにⅡ式は区画によって帯状の斜行櫛歯文(古段階)と、線状の櫛歯文(新段階)に分かれる。コンドンⅢ式では文様帯の分帯化・多段化がさらに進み、古段階では口縁部と体部上半部、新段階では体部下半部にまで文様が及ぶようになる。以下ではコンドンⅠ～Ⅲ式の内容について説明する。

3-3-1. コンドンⅠ式(図4-1～11)

完形資料が少ないため共伴関係や器種構成は不明である。口径と器高がほぼ同じ比率となる深鉢が中心になるものと考えられる。口縁部付近を中心に、基本的に一つの文様要素が横位に展開する。内田2011a・bのKnV1式に相当する。

図4-1～7はクニャゼボルコンスコエ1遺跡(2006年)第1発掘区Ⅱc層出土のものである。図4-1は、口縁部直下に刺突文とその下部に爪形文が横位に展開する。口縁端部は内側に弱くつまみだされる。刺突文と爪形文との文様の組合せが見られるが、口縁部のみに文様が施文されていることからコンドンⅠ式の特徴を備えている。図4-2は、口縁端部断面形態が「T」字形となり、口縁端部の外面に刻目文をもつ。図4-3は図3-1と同図であり、年代値別段階変遷におけるⅠ段階に相当する。アムール編目文が成立する以前には、櫛歯文土器や爪形文が分布していたものと考えられる。

図4-4～7は口縁部外面付近を中心に、口縁部直下に空白帯をもち、その下部から菱形型押文が2～3列に帯状に横位展開する。型押文内部には点状文をもっている。また、菱形以外にも円形型押文も確認されている。クニャゼボルコンスコエ1遺跡の菱形や円形

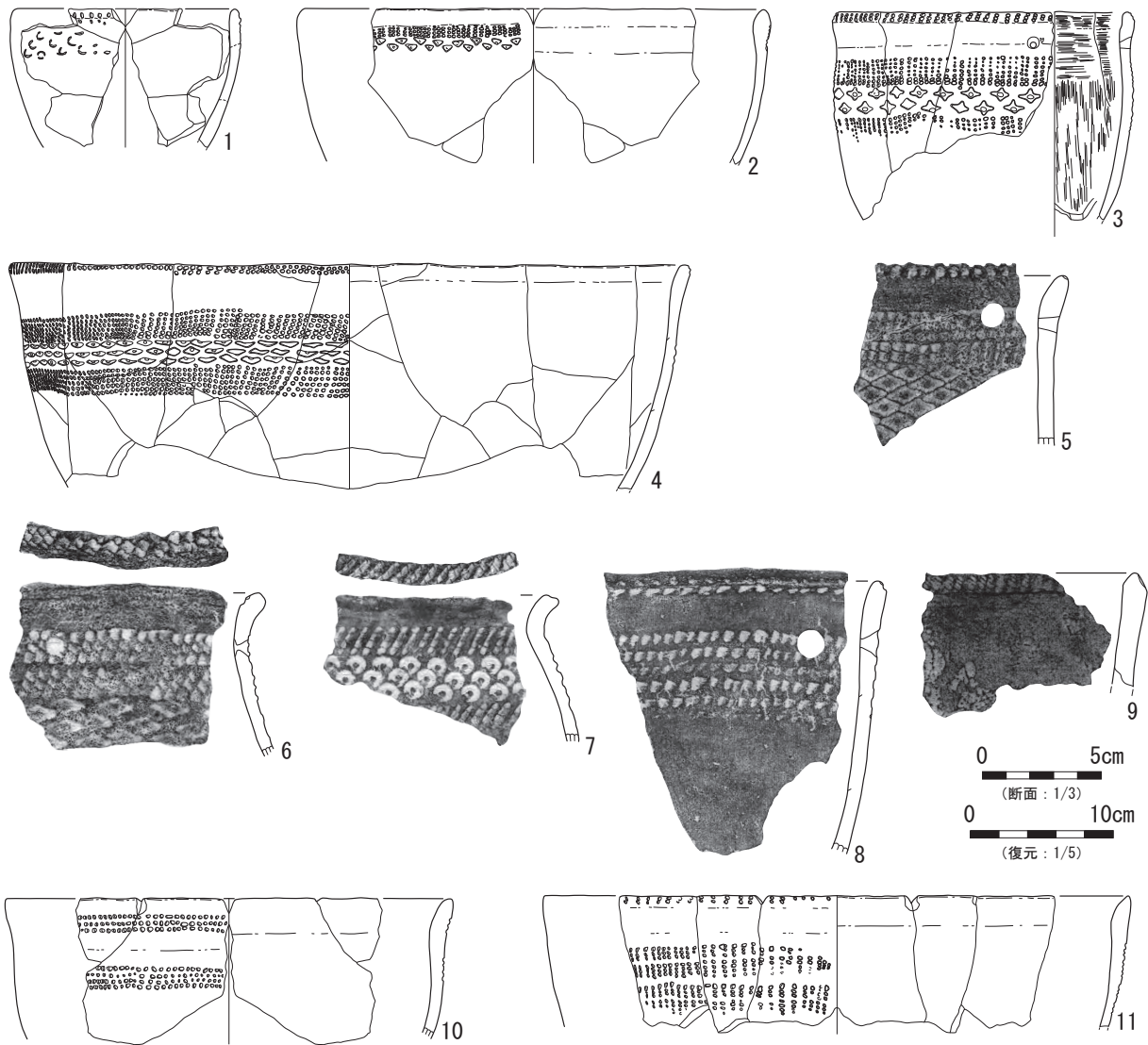


図5 コンドンII a式

型押文土器の口縁端部には施文されず、口縁端部の内側が整形されて、端部断面形状が三角形状となるという特徴がある。

図4-8～11はクニャゼボルコンスコエ1遺跡(2006年)第1発掘区Ⅱb層出土の櫛歯文土器であるが、沈線文による区画文をもつことから、ルドナヤ式から影響を受けたものであろう。図4-10・11では口縁部直下から櫛歯の押捺施文がなされ、図4-11では口縁端部にまで施文が及ぶ。こうした特徴はルドナヤ式土器の指標となっている(Батаршев2009)。

クニャゼボルコンスコエ1遺跡(2006年)の層位状況や施文方法を基にすれば、アムール河下流域ではアムール編目文につながる型押文土器は櫛歯文土器よりも後出のものと考えられる。櫛歯文土器の一群を古段階、菱形型押文の一群を新段階としておく。

3-3-2. コンドンII式(図5～6)

器種構成は基本的にコンドンI式と同じく深鉢を

中心とするが、口縁が窄まる壺形土器が新たに組成に加わる。口縁部及び体部上半部には型押文や櫛歯文が帯状に横位展開する。基本的に型押文は櫛歯文と組み合わせる文様構成となり型押文単一では施文されない。一方櫛歯文は口縁部と体部上半部に分かれて単一の文様構成をとることから、コンドンI式からの櫛歯文の系統的な連続性は認められる。また、コンドンI式に見られた型押文内部の点状文は当型式でも確認される。コンドンII式の大きな特徴として内面を黒色処理して磨いて器面を調整している。

体部上半部の型押文の上下または上部に帯状に櫛歯文が展開するもの(古段階)と、型押文の上下に線状の櫛歯文⁵⁾が横位展開するもの(新段階)がある。

・コンドンII式古段階(図5-1～11)

当型式は、口縁部付近及び体部上半部にかけて型押文と櫛歯文が帯状に展開し、型押文帯の上下または上部に櫛歯文が施文される特徴がある。型押文には、三

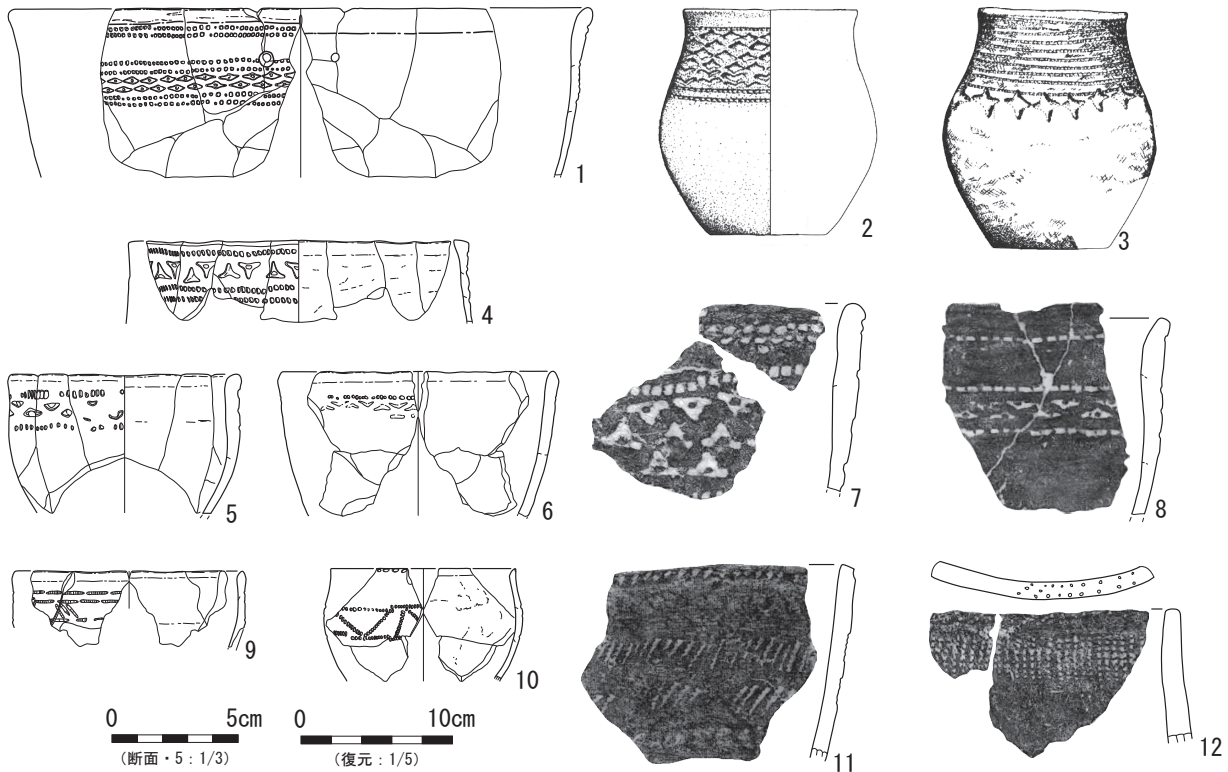


図6 コンドンII b 式

角形(図5-2)、菱形(図5-4~6)、円形(図5-7)等があり、図5-3は菱形からの変容した十字形、図5-1は竹管状の押捺施文具によって斜行施文されているものなどがある。櫛歯文も型押文系土器と同様の施文部位をもつ(図5-8~10)。

器形は、広口の深鉢(図5-2・4・10・11)や口縁が窄まる深鉢(図5-6・7)がある。クニヤゼボルコンスコエ1遺跡では図5-6・7の土器で完形復元されたものがないため、II式古段階で出現する壺形土器との器形の差を比較することができないが、こうした口縁の窄まる深鉢(もしくは鉢)がその祖型になるものと考えられる。また、図5-4・11のように口径が30~45cm以上の広口の深鉢が現れる。

基本的に口縁部は直立するもの(図5-1~3)や、外側に向かって開くもの(図5-4~11)がある。口縁内面側を整形して断面が三角形となるもの(図5-9~11)や、外側に屈曲するもの(図5-5)、丸みを帯びて肥厚するもの(図5-2)などがある。口縁端部上面に櫛歯文が施文されたりするようになる(図5-5~7)。

・コンドンII式新段階(図6-1~12)

コンドンII式新段階の文様は、線状の櫛歯文による区画と三角形や「V」字形(小鳥形文(птичек))の対向する型押文が帯状に施文される特徴がある。この小鳥形文は沿海地域のセルゲエフカ(сергеевский)式の特徴的な文様である(Багаршев2009)。

器種構成はコンドンII式古段階と同じであるが、コンドンII式新段階では口縁が窄まる壺形土器(図6-2・3)が新たに組成に加わることも特徴として挙げられる。

型押文土器では、多段化した菱形(図6-1・2)や菱形文から変形した十字形(図6-3)、対向する三角形(図6-4・5・7・8)、小鳥形(図6-2・6)等の型押文の上部または上下部に線状の櫛歯文を1・2~数条施文して区画している(図6-1~8)。図6-2は菱形型押文の下部二段に小鳥形文が配され、図6-6も「V」字形の小鳥形文が交互に列状に配しされている。

櫛歯文土器は、櫛歯状工具によって一~二段で押捺施文された櫛歯文による文様帯を体部にもつもの(図6-11)や、細かい櫛歯単位をもつもの(図6-12)がある。図6-9・10は体部に線状の櫛歯文や絡条体によって区画された間に、斜行または三角形の文様モチーフをもつものである。コンドンII式古段階のような櫛歯文による帯状の横位展開とは明らかに異なる線状の文様を組み合わせた文様構成が現れる。

口縁部は直立するものや外側に開くものがある。口縁端部を外側に屈曲させているのはコンドンII式古段階と共通する。口縁内面側を整形するもの(図6-1・8・10)や断面が三角形になるもの(図6-6・9)などがある。

3-3-3. コンドンIII式(図7)

コンドンIII式土器はそれ以前の型式と比べて文様

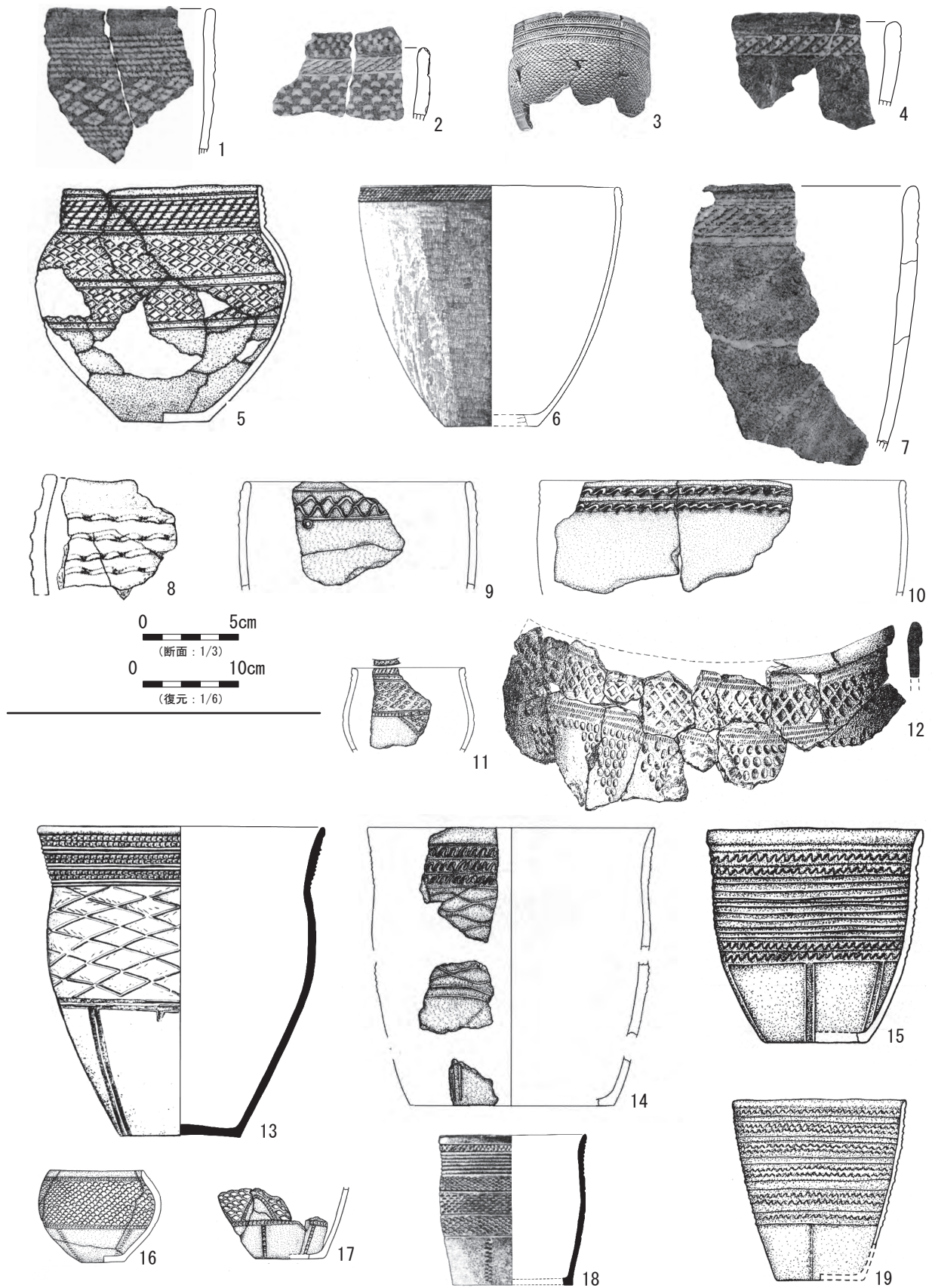


図7 コンドンⅢ a・b式

の種類が多様になる。型押文では菱形の内部装飾(「×」形等)(図7-1)や半截竹管状工具による押捺施文が密に繰り返される「魚鱗文(чешуйчатый орнамент)」(図7-2・3)、口縁部付近の平行沈線文間に斜行沈線による格子目文様をもつ溝彫文(каннелюра)(図7-4~7)、波状の隆起線文土器(図7-8~10)⁶⁾等がある。

文様帯は、口縁部から体部下半部へと器面全面にまで広がり、文様帯の分帯化・多段化が明確に意識される。器種構成は深鉢を主要な器種としているが、コンドンⅡ式までは広口の深鉢が中心であったが、コンドンⅢ式では寸胴形の深鉢が中心となる。

コンドンⅢ式は、文様帯の施文範囲と垂下する隆起線文の有無等から細別した。コンドンⅢ式古段階は、コンドンⅡ式の施文範囲を踏襲し、口縁部+体部上半部に文様帯があり、型押文内部への装飾(「×」形や細隆線等)が施される。コンドンⅢ式新段階では文様帯がさらに下半部にまで及び、垂下する隆起線文が施される。年代値別段階変遷ではⅢ段階に相当する。本型式の資料は、マラヤガバニ遺跡(2007・2008年)(福田他編2011)やコンドン60遺跡第8・9号住居址(Окладников1984)⁷⁾、ボズネセンスコエ(Вознесенское)遺跡(Медведев и Филатова1997)、スサニノ(Сусанино)4遺跡(Конопацкий1990)等の資料が相当する。

・コンドンⅢ式古段階(図7-1~10)

口縁部と体部上位に文様帯をもつもので構成される。魚鱗文や溝彫文の成立、菱形型押文の内部装飾(×字状や細隆線等)が現れる。器形は、直立する口縁をもつ深鉢が中心となるが、短頸の肩部をもつ深鉢などもある(図7-5)。

図7-1は、菱形型押文の内部装飾をもつ土器であり、絡条体と考えられる線状の区画が上下に施されている。破片資料であるため全体の文様構成は不明であるが、下段区画の4条の絡条体の下部にも菱形型押文が帯状に横位に施文されているものと考えられる。

図7-2・3は、半截竹管状工具によって密に施文を行う魚鱗文土器である。図7-2は、口縁部外面に細い沈線文間に斜行櫛歯文をもち、その下部には斜行竹管文が密に施文されて魚鱗文が構成されている。口縁部は直立し、端部は丸く整形され、端部には斜行櫛歯文が施文されている。

溝彫文は、①溝彫文(口縁部)+魚鱗文(体部)(図7-2・3)、②溝彫文(口縁部)+菱形文(体部)(図7-5)、③溝彫文(口縁部)のみ(図7-6・7)の三パターンがあり、口縁部文様帯となることが共通している。図7-4は溝彫文に類似するが、沈線文間に

櫛歯スタンプ文が帯状に横位に施文されている。

波状の隆起線文土器は、ボズネセンスコエ遺跡(図7-8)やコンドン60遺跡(図7-9・10)等アムール下流域南西部で確認されている。アムール河下流域河口部にもこうした土器が分布しているのかは現状ではわからない。加えて口縁部のみに波状の隆起線文をもつ土器は詳しい出土層位がわからないため、図7-11・12のような体部下半部に逆三角形モチーフをもつ土器同様に時間的な位置づけが難しい。しかし、後述するコンドンⅢ式新段階の多段化する文様帯の中に波状の隆起線文をもつ土器があることから、少なくともこれよりは古い段階に成立しているものと考えられる。

なお、図7-11・12は、体部下半部に逆三角形モチーフをもつ型押文土器であり、逆三角形モチーフを構成する要素は、沈線や櫛歯で三角形を縁取りその内部に菱形型押文を充填するもの(図7-11)や浮文(図7-12)となる。

・コンドンⅢ式新段階(図7-13~19)

基本的な文様構成や器種構成はコンドンⅢa式と変わらないが、体部下位に垂下隆起線文や竹管押引文をもち、文様帯の分帯化が明確に現れる。型押文系の魚鱗文土器(図3-51・52)や波状の隆起線文土器(図3-49・50・53・54)がある。特に図3-49・50のようにアムール編目文から変容したと考えられる菱形貼付文がある。

4. 沿海地域のルドナヤ式土器の分類

4-1. ルドナヤ式土器の細別

沿海地域の新石器文化は、初期：ウスチノフカ(устиновская)文化(13000~9000/8000BP)、前期：不明(9000~8000BP?)、中期：プロトボイスマンコンプレックス(протбоисманская)、ルドナヤ文化、ボイスマン(боисманская)文化、ベトカ2タイプの遺跡(7500~5000BP)、後期：ザイスノフカ(зайсановская)文化(5000~3200BP)とされている(Батаршев2009; Попов и др 2005; Морева2005など)。

Батаршев(Батаршев)С.В.は、ルドナヤ文化をルドナヤ式(руднинский тип)(7500~7000BP)とセルゲエエフカ式(сергеевский тип)(7000~6000BP)の二時期に細分した(Батаршев2009; Батаршев и др 2010)。

Батаршев(2009)によって挙げられたルドナヤ式土器の特徴は、アムール編目文の文様構成をもつ平底の寸胴形の深鉢である⁸⁾。口縁部は直立するものが多く、内傾または外反するものが時々見られる。口縁端部は平らになるか丸くなり、断面形態は「Г」字

形または「T」字形となる。型押文の文様種類は、菱形や三角形、楕円形などがあり、絡条体圧痕なども存在する。文様は帯状に展開し、下端部に沈線文による区画をもつものがある。

伊藤慎二は、モレーバ (Морева) О.Л. やシェフコムードらによって整理された沿海地域とアムール河下流域の土器編年を参照枠として、ロシア極東地域の新石器文化編年を検討した (伊藤 2006)。ルドナヤ文化を古段階・新段階に大別し、それぞれをさらに2期に細別している (伊藤 2005)。特にルドナヤ文化については、単一の文様施文から異なる文様と組み合わせることや口縁部文様帯の区画が成立すること、そして口縁部文様帯の区画文様が複雑化し、口縁部文様帯内がさらに分帯し多段化する変遷を想定している。伊藤の指摘した文様帯の複雑化・多段化の変遷については、本論でも分類の指標とする要素の一つである。

4-2. セルゲエエフカ式土器

バトルシェフ (2009) によるセルゲエエフカ式土器の特徴としては、平底土器であり、頸部の有無による器形の違い、最大径が土器下半部にあるといった特徴などがある。口縁部の形状は、直立するか弱く外反し、口縁端部は左右対称になるものや、内面か外面の一方を整形するため左右非対称となるものなどがある。文様は土器上半部に帯状に展開するものが多い。菱形や三角形を組合せた型押文で構成されるアムール編目文、小鳥形、括弧形 (скобок)、楕形、短冊形などの文様、さらに縄文や押引文などもあり、ルドナヤ文化よりも文様のバリエーションが多様になる。また文様構成としては、線状の櫛歯文や縄文が数段に分かれて施文され、その間には小鳥形文が帯状に配される。また、セルゲエエフカ式土器には、直線または波状の隆起線文土器や絡条体を施文する土器などが伴うとされる。

小鳥形文土器を伴う文化をクリューエフ (Клюев) Н.А. らはシエクリヤエボ (шекляевская) 文化として設定している (КлюевГарковик 2006・2008)⁹⁾。沿海地域の西部と中央部を中心に分布し、同文化に含まれるとされるドボリヤンカ (Дворянка) 1遺跡の住居址床面から得られた炭化物の測定年代値が 7615 ± 180BP、ノボトロイツコエ (Новотроицкое) - 2遺跡では 6920 ± 50BP となることから、おおそルドナヤ文化に併行するものとされた。シエクリヤエボ文化は、土器だけではなく、石器や住居址なども含めた考古資料を総体として捉えた概念に近い。そのため本論ではほぼ土器のみを分析対象としているバトルシェフによるセルゲエエフカ式の定義を踏まえて検討を行うことにする。

4-3. ベトカ式土器とボイスマン式土器

ルドナヤ文化・セルゲエエフカ文化に後続する文化としてベトカ (веткинская) 文化が設定されている (Попов и др 2005; Ророн 2008)。ベトカ式 (веткинский тип) 土器は、すべて平底の深鉢形土器で、しばしば胎土混和材として貝殻粉末が用いられ、文様は型押文と貼付文が中心となる (Морева и др 2008)。ベトカ式土器の年代測定値は 6100 ~ 5735BP となり、年代値上でもルドナヤ・セルゲエフカ式に後続する。ただしベトカ文化とハンカ湖北岸域の新開流文化 (黒龍江省文物考古工作队 1979) との違いは明確ではなく、同一の文化であるものを中国領では新开流文化、ロシア領ではベトカ文化とされているにすぎない。本論ではロシア極東地域を対象としているため、便宜的にベトカ文化の名称を使用する¹⁰⁾。

沿海地域南部では、モレーバがボイスマン文化を 1 ~ 5 段階に分類し、1・2 段階 (6765 ~ 5870BP 頃) がアムール編目文土器を含む段階である。また、ボイスマン文化に先行する段階としてプロトボイスマン段階を設定した (Морева 2003・2005; Морева・Попов 2003)。プロトボイスマン段階は、キャリパー形の口縁部付近に角押文をもつ尖底深鉢形土器であり、ボイスマン 2 遺跡で得られた放射性炭素年代測定値から 7110 ± 60 ~ 7010 ± 70BP となり、年代測定値上ではルドナヤ式からセルゲエエフカ式への移行期に相当する。また、ボイスマン文化第 1 段階が 6710 ± 55BP ~ 6215 ± 130BP、第 2 段階が 6150 ± 40BP ~ 5985 ± 115BP となり、年代測定値上では、セルゲエエフカ式におおよそ併行する。

4-4. 沿海地域中部の中期新石器土器の分類

沿海地域中部 (ハンカ湖周辺) 及び東部 (日本海側) で調査されたルザノバ・ソプカ (Лузанова Сопка) 2・5 遺跡、セルゲエエフカ (Сергеевка) 1 遺跡、ドボリヤンカ 1 遺跡、ノボトロイツコエ 2 遺跡、シエクリヤエボ 7 遺跡、ベトカ 2 遺跡、ルドナヤプリスタニ 遺跡、マリヤク・リュボルフ (Моряк-Рыболов) 遺跡出土土器等を基に土器分類を試みた。

4-4-1. ルドナヤ式土器 (図 8)

ルドナヤ式土器は、深鉢や鉢の器種で構成され、口縁部付近を中心に型押文が施文される。口縁端部は櫛歯文や沈線文、絡条体によって施文される。型押文の種類には円形文、横長・縦長の楕円形文、三角形文、短冊形文があり、これらが縦位・横位・斜位の組合せや逆三角形等々の文様モチーフをとったりする。ルドナヤ式土器は、伊藤 (2005・2006) を参照して、口縁部付近に施文された型押文下部への細沈線文区画の

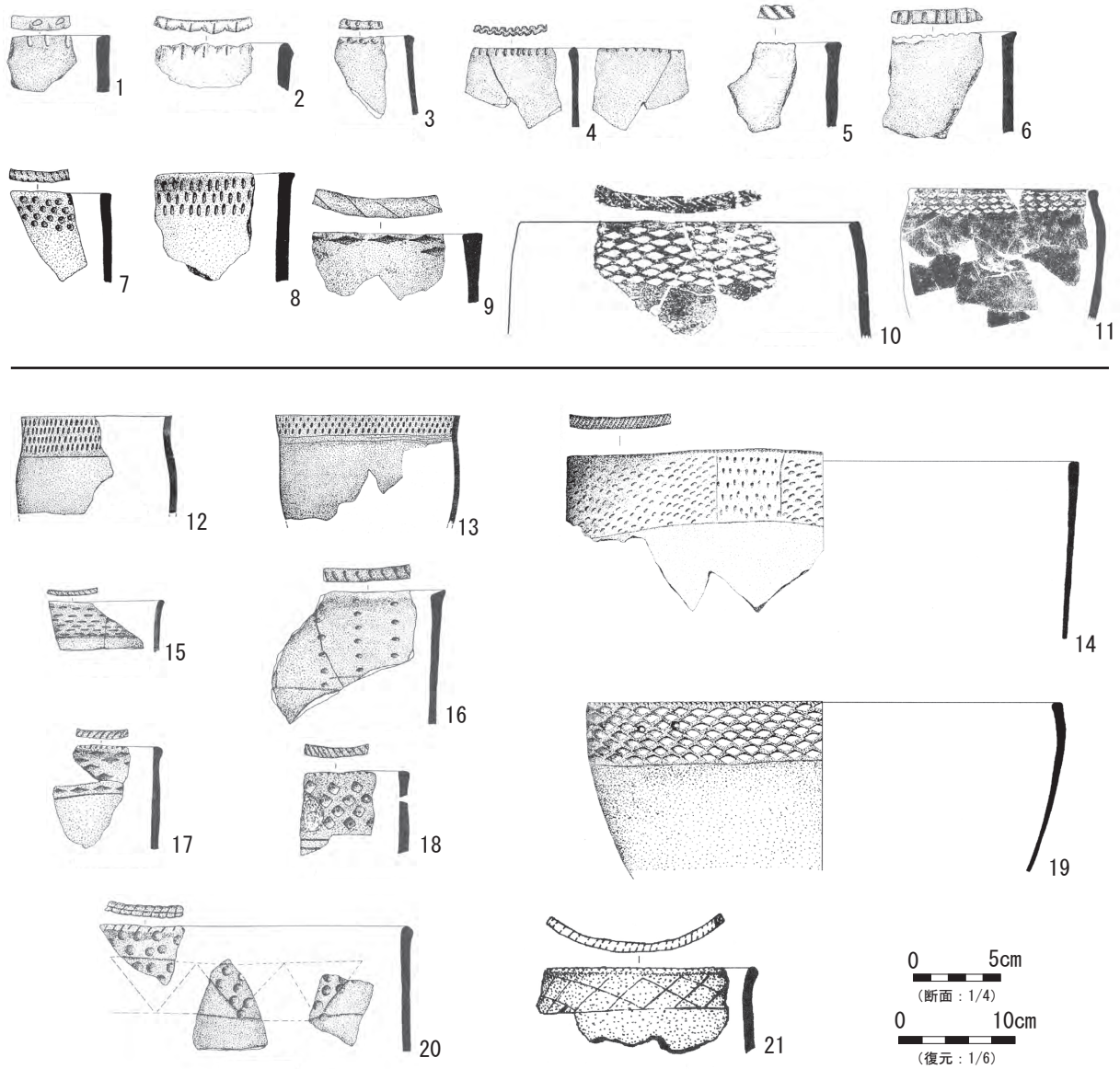


図8 ルドナヤ式

有無によって新古二段階に分類した。本型式は、ルザノバ・ソプカ2遺跡やルドナヤプリスタニ遺跡の資料が相当する。

・ルドナヤ式古段階 (図8-1~11)

ルドナヤ式古段階は、口縁端部に刻目文や縄文、刺突文等をもつ土器 (図8-1~6) と、口縁部付近を中心に円形、楕円形、菱形等の型押文土器 (図8-7~11) に大きく分けることができる。型押文土器は口縁部が直立するか、内湾する深鉢となり、口縁部直下から菱形型押文が帯状に施文されている (図8-9~11)。口縁端部は、主に端部を削り取って平坦とするものが主体となり、断面形状が「T」字形のものが多く (図8-5・6・8・9)。口縁端部のみに文様施文する一群と型押文の一群には時期差が存在するかもしれないが、良好な層位に基づいた資料に恵まれていないので、古段階の細分については将来的な課題の一つであろう。

・ルドナヤ式新段階 (図8-12~21)

ルドナヤ式新段階は、口縁部付近に帯状に横位展開する型押文の下部には細い沈線文によって区画されている。基本的な型押文の文様は、円形、横長・縦長楕円形、菱形等となり、古段階と同様である。文様モチーフには、逆三角形状になるもの (図8-20) や細沈線文によって格子状になるもの (図8-21) などがある。口縁端部の断面形状では、古段階に見られた「T」字形のものがほとんどなくなり、端部が平坦となるものや内面側を削り取って整形されるものが主体となる。

4-4-2. セルゲエエフカ式 (図9)

セルゲエエフカ式土器は、深鉢や鉢に加え、壺形土器 (図9-3) が新たに器種構成に加わる。文様は、型押文 (図9-1~10)、小鳥形文 (図9-11~16)、沈線文 (図9-17)、波状の隆起線文 (図9-18~21) 等があり、ルドナヤI式土器よりも器種や文様の種類

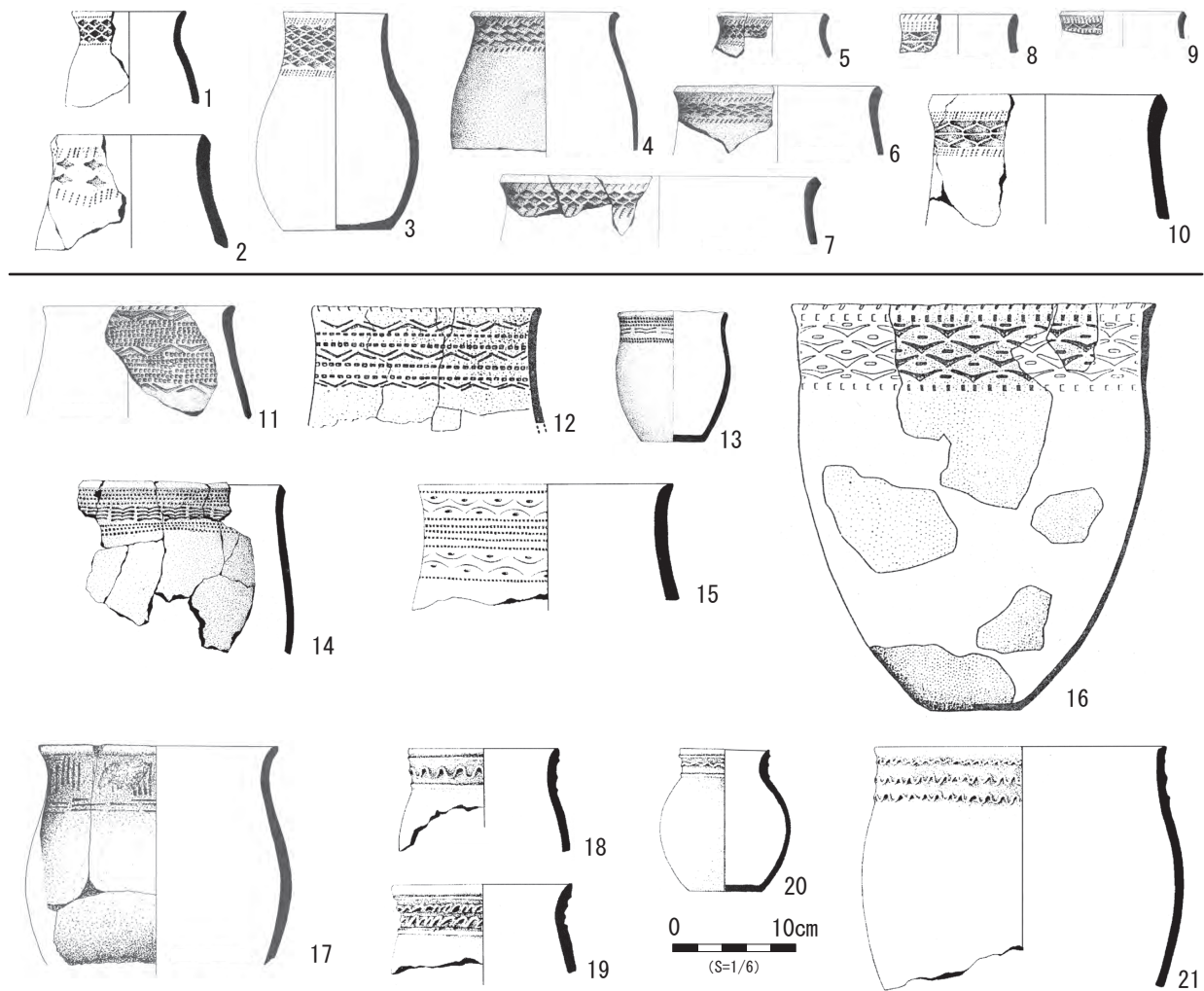


図9 セルゲエエフカ式

が増える。

菱形や対向する三角形型押文の上下部には櫛歯文が帯状に横位展開する。この種の様構成は基本的にルドナヤ式と変わらない。また、この型押文をもつ土器の内面は黒色処理が施されて磨かれるものが多い。

また、菱形や三角形型押文から変化したと考えられる小鳥形文や括弧形文の上下部には線状の櫛歯文が横走り、ルドナヤI式土器よりも文様の区画・分帯化が進む傾向にある。型押文土器における区画が、櫛歯文によるものと線状の櫛歯文を基準として、新旧二段階に分類した。本型式資料は、ルザノバ・ソプカ5遺跡、ドボリヤンカ1遺跡やノボトロイツコエ2遺跡、シエクリヤエボ7遺跡、セルゲエエフカ1遺跡、ルドナヤプリスタニ遺跡が相当する。

・セルゲエエフカ式古段階 (図9-1～10)

セルゲエエフカ式古段階は口縁部付近を中心に文様が帯状に横位展開する。口縁部直下には空白帯をもち、その下部に菱形 (図9-1～7) や対向する三角形 (図9-8～10) の型押文が帯状に施文される。そ

の型押文の上下部には櫛歯文が横位に配される。型押文には2～多段となる菱形文 (図9-1～7) や、対向する三角形が一組または二組配される (図9-8～10) が基本となる。

器種構成は、寸胴形の深鉢が基本となり、口縁が窄まり頸部をもつ壺形土器がある。後者には口縁が直立するもの (図9-2・3)、外側に開くもの (図9-1・4～7) 等がある。口縁端部の外面は面取りされる。寸胴形の深鉢には対向三角形の型押文、壺形土器には帯状の櫛歯文+菱形型押文が配され、当型式段階の土器内面は黒色処理化されて丁寧な磨きかけられるという特徴がある。

・セルゲエエフカ式新段階 (図9-11～16)

当段階は、いわゆる小鳥形と呼ばれる「V」字形や括弧形の型押文をもつ土器で構成される。型押文の上下部には1～2条を基本とする線状の櫛歯文によって区画される。小鳥形文は、菱形や対向三角形文などから変化したと考えられている (Дьяков 1992 : p94)。基本的な器種構成は古段階と変わらないが、口縁端部

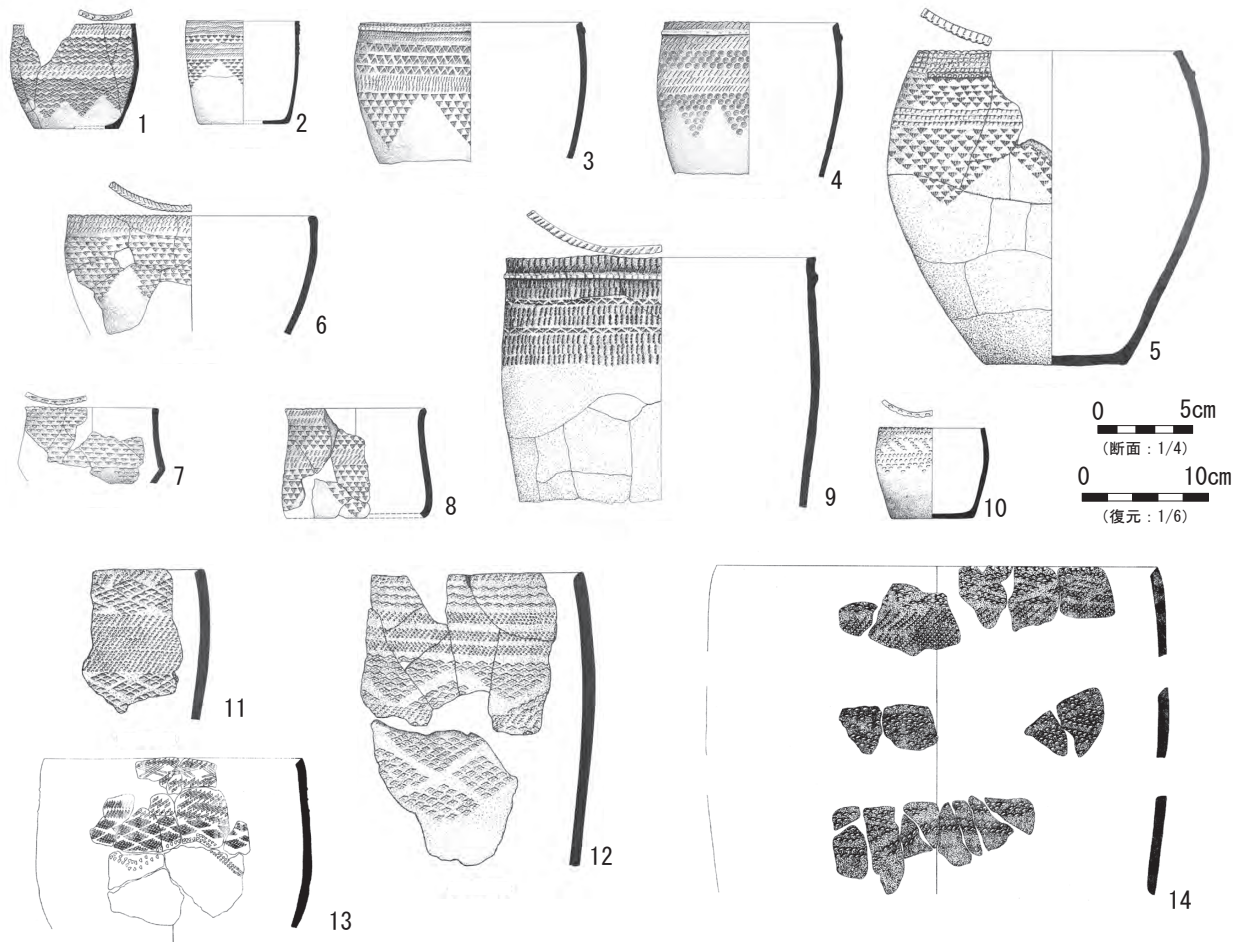


図 10 ベトカ式

が丸く整形される。

新段階には、縦方向連続した沈線文を横位に施文するもの(図9-17)や、波状の隆起線文土器(図9-18～21)等が伴うと考えられる。波状の隆起線文土器は、口縁部付近に文様が施文される。波状隆起線の上下には直線状の隆起線で区画されている(図9-18～20)。この文様をもつ土器は、口縁が窄まる壺形土器や深鉢などがある。

4-4-3. ベトカ式(図10)

ベトカ式土器は、ベトカ2遺跡やマリヤク・リュボルフ遺跡出土資料が相当する。寸胴形の深鉢(図10-14等)が中心となり、広口の深鉢(図10-6)、体部が球形になるもの(図10-5)等がある。

口縁部が直立またはやや外反し、口縁端部の内側が面取りされ平らとなる。文様は、型押文と櫛歯文や絡条体の組み合わせによって構成されている。特に型押文は、菱形、円形、三角形、四角形等を基本要素として、直線状、波状、網状、三角形状等の文様モチーフをもつ。特に体部の逆三角形状の文様モチーフが特徴的である。櫛歯文・絡条体が区画となり、型押文が帯状に横位展開して、口縁部から体部にかけておおそ4～

5段の文様帯構成となる。また口縁部には断面が台形となる突帯が張り付けられている(図10-3～5・9)。

ベトカ式は数型式の細別が可能と考えられるが、資料的な制約があることから、本論では一型式として把握しておく。

5. アムール編目文土器の細別

アムール河下流域及び沿海地域における各型式の類似点と差異点を捉えて、その併行関係をまとめると大別三期に分類することができる。この三期区分を文様帯の変遷をもとにして示したものが図11である。以下では、各型式を対比しながら、各期の内容を確認することにしたい。

5-1. I期：コンドンI式とルドナヤ式

I期は、コンドンI式とルドナヤ式がおおよそ併行する。アムール河下流域では櫛歯文、沿海地域では菱形等の型押文土器が主に分布する。ただし、アムール河下流域で型押文が成立する前には、口縁部付近に櫛歯文や刺突文を施文する段階がある。コンドンI式でも古段階に相当するのと考えられる。口縁部外面や上面を中心に刻目文や縄文、刺突文などを施文する一

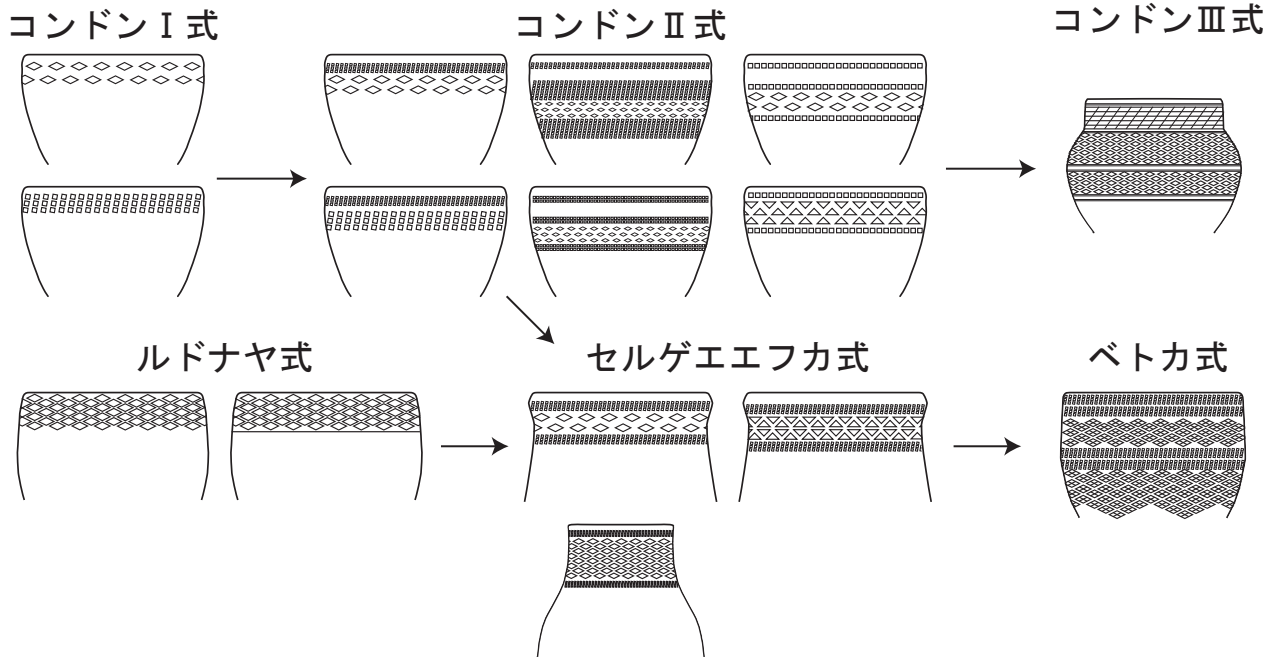


図 11 アムール編目文の変遷過程

群の土器が存在するものと考えられる（図 4- 1～3、図 8- 1～6）。口縁部断面形態が「Γ」字または「T」字形となるが、この断面形態はルドナヤ式土器の型押文土器にも共通する要素である（図 8- 5・6・8・9）。

型押文土器については、両地域に菱形型押文を口縁部付近のみに施文するなど共通する要素はあるが、施文方法が異なるようである。ルドナヤ式では、口縁部直下から空白帯を持たずに菱形型押文が帯状展開し、口縁端部に型押文や縄文等が施文される。一方でコンドンⅠ式新段階では、型押文は空白帯を設けたその下部から施文することや、口縁端部には施文しないといった違いがある。ただし、アムール河下流域の櫛歯文や刺突文土器は、ルドナヤ式土器の型押文と同じく空白帯をもたずに口縁部直下から帯状展開して施文されることから、アムール河下流域では、型押文よりも櫛歯文や刺突文土器が古相の段階に位置づけられる蓋然性は高いと考えられる。

また、アムール河下流域ではルドナヤ式から影響を受けたと考えられる土器が分布する。図 4- 8～11 はルドナヤ式に特徴的な沈線文による区画文をもち、その間をアムール河下流域で特徴的な櫛歯文と組み合わせている。しかし、一方の沿海地域には櫛歯文土器の影響は見られない。菱形型押文はルドナヤ式からコンドンⅠ式に影響を与えているものと考えられる。

I 期については、口縁端部周辺に文様を施文する段階から、口縁部付近に文様を広げて施文する段階がある。櫛歯文や型押文など主要な文様や施文の原則に違いがあるものの、押捺施文の技術を有している点は共通している。菱形型押文の成立については、ルドナヤ式の方がコンドンⅠ式よりも早い段階で成立している

ものと考えられる。そして、ルドナヤ式新段階の細かい沈線文による区画についてもアムール河下流域の櫛歯文土器に取り込まれている。

5-2. II 期：コンドンⅡ式とセルゲエエフカ式

コンドンⅡ式とセルゲエエフカ式土器は、I 期よりも文様構成や器面調整技術等において多くの共通点を有するようになる。両型式の新旧段階を細分する際の指標となるのが、帯状に横位展開する櫛歯文と線状の櫛歯文等による区画の存在である。この区画内に菱形や対向する三角形の型押文が複数段施文されている。ただし、施文部位については、セルゲエエフカ式土器がルドナヤ式と同様に口縁部付近を中心とするが、コンドンⅡ式では、口縁部と体部上半部にまで及ぶようになる。これは両地域で主要となる深鉢の形態に左右されているものと考えられる。

対向する三角形文はセルゲエエフカ式古段階から見られるが、現在のところアムール河下流域では新段階以降に線状の櫛歯文に伴って現れる。さらにセルゲエエフカ式新段階では、沈線文によって描出される小鳥形文が菱形や対向三角形の型押文からの変化として理解されるだろう。

セルゲエエフカ式では、波状の隆起線文や沈線文土器等があり、押捺、貼付、描線など施文技術の分化が見られる。押捺施文技術については、アムール河下流域の型押文と櫛歯文の帯状展開が基本となる。コンドンⅡ式古段階では、型押文と櫛歯文を組み合わせた文様帯となり、コンドンⅠ式と同様に押捺施文技術が中心となる。コンドンⅡ式新段階では、帯状の櫛歯文から線状の櫛歯文による区画へと変化する。この線状の

櫛歯文による区画がコンドンⅢ式にも続き、さらに沈線文による区画へと変化していくものと考えられる。アムール下流域と沿海地域では区画に使用する文様が決定的に異なっていくようになる。

器面調整技術の面からは、コンドンⅡ式とセルゲエエフカ式土器の各段階における型押文と櫛歯文を伴う土器の内面が黒色処理され磨きが行われる。こうした器面調整技術の共通性も両型式には確認することができる。また、口縁端部は、コンドンⅡ式では丸みを帯びるものが多くなるのに対して、セルゲエエフカ式土器では、基本的にルドナヤ式の口縁端部形態と同じく面取りされるものが多い特徴がある。

器種組成については、セルゲエフカ式土器では深鉢、や鉢、壺形土器で構成されるのに対して、コンドンⅡ式は基本的にコンドンⅠ式と同じく広口の深鉢を中心とし、口径の大きいものが多くなる。壺形土器もあるが小鳥形文の型押文を伴うことから、アムール河下流域の壺形土器はセルゲエエフカ式からの影響のものであろう。器種構成と主体となる器形の違いは、コンドンⅡ式が内陸河川部地域を中心としていることや、セルゲエエフカ式が海岸・湖岸部地域に主に分布していることと関係しているものと考えられる。

5-3. Ⅲ期：コンドンⅢ式とベトカ式

Ⅲ期はコンドンⅢ式とベトカ式が相当する。この時期には、口縁部から体部下半部にまで文様帯の多段化・分帯化がⅡ期よりも区画への意識化が進む。

コンドンⅢ式では内部に装飾をもつ菱形型押文の文様帯の上下部に、線状の櫛歯文や絡条体、直線状の沈線文によって区画されるようになる。帯状に横位展開する櫛歯文はコンドンⅡ式以降には用いられなくなり、コンドンⅢ式でも同様の傾向となる。古段階と新段階では器種構成や文様構成に変化はないが、文様帯が体部下半部にまで及ぶようになることが、分類の大きな指標となる。

ベトカ式でも内部装飾された菱形や三角形の型押

文が施文される。型押文は櫛歯文との組合せによって文様帯が構成されて、分帯化・多段化による区画がなされる。コンドンⅡ式以降見られなくなった文様構成が、セルゲエエフカ式からベトカ式まで継続して施文されている。

口縁部から胴部上半までの区画から、さらに下端へと文様施文が広がる。ベトカ式では逆三角形の文様モチーフが用いられており、コンドンⅢ式でもこの文様構成をもつ土器が散見される。アムール河下流域では量的にまとまった資料がないため、詳細な検討は将来的な課題となるが、アムール河口部周辺のスサニノ4遺跡で出土していることから、この種の文様は広域的に分布していることが想定されるだろう。なお、この時期にはアムール下流域で魚鱗文土器(図7-2・3)が成立するが、これは沿海地域北部にあるオルリニクリューチ(Орлиный Ключ)遺跡(Лынша и Тарасенко2015)でも出土している。魚鱗文土器はアムール下流域だけの分布ではないが、沿海地域中部では今のところ出土していないようである。

また、コンドンⅢ式とベトカ式の問題については、セルゲエエフカ式で構成されている型押文以外の隆起線文土器や沈線文土器等との共伴性がどうなっているのかが今のところ分からない。Ⅲ期については資料的な制約があるため、これ以上の言及が難しいため、型式の構成については、将来的な課題としておきたい。

6. アムール編目文土器の展開

次に本論で示した三期区分を基にしてロシア極東地域の他地域の様相を確認し、アムール編目文土器の展開について検討することにしたい。対象とする地域は、アムール編目文土器が出土するサハリン島とアムール河中流域・三江平原周辺である。

6-1. サハリン島

サハリン島で型押文土器が出土する遺跡として、サハリン島中部のアド・ティモボ(Адо-Тымово)2遺

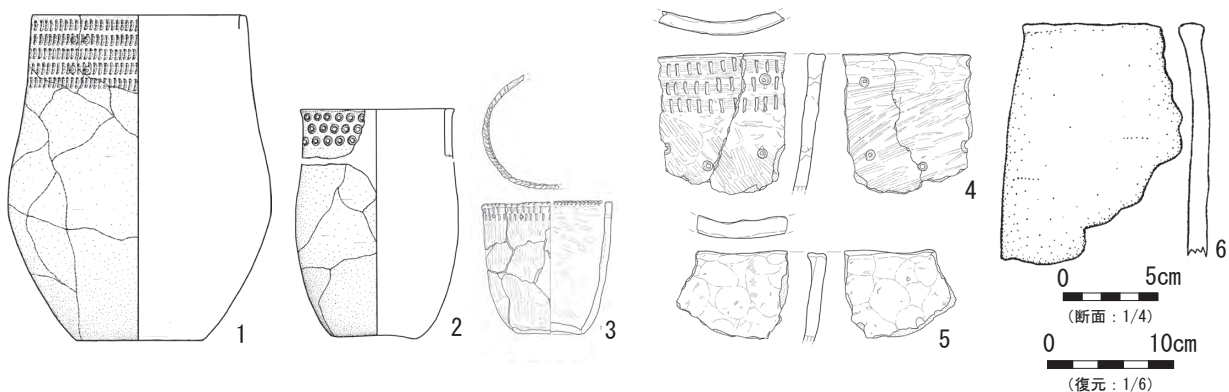


図 12 サハリン島における型押文土器

跡がある（グリщенко и др 2017；福田他 2015a；ヤンシナ他 2012）。本遺跡からは、アド・ティモボ2群とされる型押文を含む一群の土器がある（図 12）。土器を伴う以降出土木炭の年代は 7350-7380BP となる（福田他 2015a）。本土器群についてはヤンシナ（Яншина）O.B. と福田正宏によって詳細な土器観察がなされているので、本論と関係する型押文の内容を確認することにしたい。

口縁部がほぼ直立し、胴部が口径よりも膨らみ、平底となる（図 12- 1）。図 12- 2 は押捺面がドーム状に凹んだ施文具による円形文を複数段配置している口縁部直下にはやや彎曲する長形状の型押文が 5 段帯状に施される。図 12- 3 は口唇部にキザミを交互に配置され、図 12- 4 は「短冊文」を口縁部付近に展開する。

図 12- 3・4 は胴部の器面調整痕が条痕文ではなく、縦方向のヘラナデ痕となり、北海道東部やアムール河下流域にも類似する資料がない（福田 2018）。ヤンシナは、器形や文様、胎土混和材、調整技術等の総合的な観点から周辺域における同時期の土器と型式学的な比較を行い、沿海地域南部のプロトボイスマン式土器やボイスマン式土器との類似性を指摘している（ヤンシナ他 2012）。本論のコンドン式やルドナヤ式の高相に位置付けた口縁端部にキザミや縄文等の文様を施文する一群との関わりがあるのであろう。

サハリン島では型押文土器が出現する前後の時期に無文／条痕文土器が在地の土器として存在している。グリщенко（Грищенко）V.A. (2011) はスラブナヤ5遺跡第1・2発掘区出土土器を二大別し、第1群を宗仁式に相当させ、第2群をスラブナヤ4遺跡出土土器と比較して胎土が異なることを指摘している。さらに福田は第3発掘区出土土器が第1・2発掘区の第2群と共通する要素があるものの、内面条痕調整をもつなどの違いがあることを指摘している（福田他 2015b）。内面条痕調整をもつ土器は、サハリン南部のスタロドゥフスコエ（Стародубское）3やポレチエ

（Поречье）4遺跡などにもあり、成形方法・胎土組成・器面調整からもスラブナヤ5遺跡第2群のような無文／条痕文土器が島内に存在しているようである。グリщенкоは近年こうした無文／条痕文土器の一群を含めたレヴィルチエイ（Левый ручей）2遺跡出土資料をレボルチインスキータイプ（леворучьинский тип (комплекс)）と呼称している（グリщенко2018）。放射性炭素年代測定値は 7130-7765BP が得られている。

6-2. アムール河中流域・三江平原周辺（図 13）

アムール河中流域は隆起線文土器が分布する範囲の一部である（大貫 1998；大貫他 2011）。新石器時代の編年自体に不明な点が多い地域ではあるが、アムール河中流域では菱形型押文が出土する遺跡が古くからいくつか知られている。図 13 にはこれまで確認されている型押文土器の一部を示した。出土遺跡は、アムール州セルゲエフカ（Сергеевка）遺跡（Окладников и Деревянко, 1977）（図 13- 1）、同州のグロマトゥーハ（Громатуха）遺跡第2文化層（Окладников и Деревянко, 1977）（図 13- 2・3）、同州のノボポクロフカ（Новопокровка）遺跡（Окладников 1975）（図 13- 4）、ユダヤ人自治区のナイフェリド（Найфельд）遺跡（Деревянко и др 1999）（図 13- 5）、黒竜江省同江市の街津口遺跡（王・張 2003）（図 13- 6）等がある。しかしこれらの資料は、グロマトゥーハ遺跡を除いて層位的な出土位置が不明の表採資料であり、報告文にも詳細な記載がない。グロマトゥーハ遺跡出土土器は、対向する三角形型押文と櫛歯文をもつものであるが、グロマトゥーハ遺跡第2文化層からは、ボイスマン式土器やマルィシエボ式土器という型押文をもつ土器型式も混在している（Деревянко и др 2017, 内田他 2018）こともあり、型式認定を行うのは難しいが、少なくとも I 期の資料

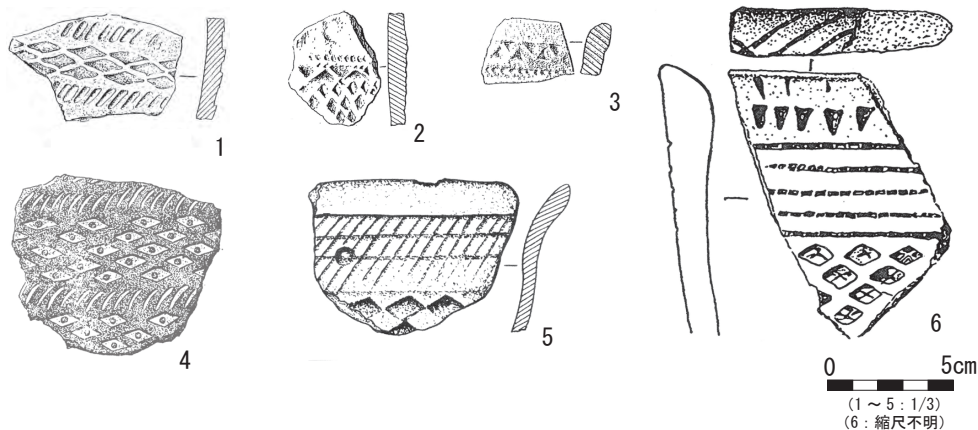


図 13 アムール中流域・三江平原における型押文土器

には相当せず、対向する三角形文が出現するⅡ期以降からマリシェボ式・ボイスマン式に至るいずれかの型式に相当するのであろう。

セルゲエエフカ遺跡ではいくつかの砂丘上からアムール編目文土器と隆起線文土器が表採されているが、時間的な先後関係を把握することは難しいものの、グロマトウーハ遺跡と同様にⅠ期の資料には該当しない。

6-3. 小結

アムール編目文土器の展開について、サハリン島とアムール中流域・三江平原周辺の様相を検討したが、各地の様相をまとめると次のようになる。

サハリン島については、これまでの研究史からサハリン島中部の型押文土器と並行する時期に、島内には型押文以外の土器群が存在するようである。図 12-5・6 のような口縁部断面形状が「T」字形となる無文土器はルドナヤ式土器に特徴的であり、アド・ティモボ 2 群土器の文様（円形や短冊形の型押文）や器形などはプロトボイスマン・ボイスマン式土器と類似する。器面調整等の面からはアムール河下流域や北海道東部との共通点がないことも含めれば、総じて沿海地域からの影響が強く認められそうではある。ただし、その経路がアムール河下流域となるのか、ハバロフスク地方の日本海沿岸域にあるのかは、今後の資料的蓄積を待たなければならないが、サハリン島の型押文土器の時間的な位置づけについては本論のⅠ期に相当すると判断できる。そして、その後のⅡ期・Ⅲ期についてはサハリン島にアムール編目文土器が分布しない。アムール河口部にはⅡ・Ⅲ期のアムール編目文土器が分布していることを考えると、サハリン島への波及が途絶える理由が存在するのであろうか。

次にアムール中流域・三江平原についてはさらに不明な点が多いが以下のことが指摘できる。現在のところアムール河中流域へのアムール編目文土器の展開については、資料的な制約が大きいため判断が難しいが、少なくともⅠ期の資料は存在しないものと考えられる。Ⅱ・Ⅲ期についても破片資料のみであり、出土数量は少ない。現在のところアムール河中流域との積極的な交渉関係は想定しにくい。三江平原については、図 13-6 のようなコンドンⅢ式に相当する資料が表採されているようであるから、遅くともⅢ期にはアムール編目文土器の分布圏に含まれていることがわかる。図 13-1・4 のように菱形型押文の上下に配される区画帯が櫛歯文ではなく、篋状か爪形状の文様になることから、アムール河下流域や沿海地域とは異なる要素をもつものかもしれない。

また、隆起線文土器の型式変遷については、現在のところノボトロフカ文化が昂々溪文化に先行するこ

とは指摘されているが、その詳細な型式学的変遷については、アムール河下流域や沿海地域における波状の隆起線文土器を含めて、今後の当該地域における重要な検討課題である。

7. おわりに

本論では、ロシア極東地域におけるアムール編目文土器の細別と展開について議論を行った。最後に本論では十分に議論を展開できなかった課題を二点挙げて本論の終わりとした。

第一点目として、アムール河中流域・嫩江流域を中心に分布する隆起線文土器とアムール編目文土器との併行関係である。本論ではアムール編目文土器の展開を検討する視点から資料を扱ったため、隆起線文土器の中心分布域における検討を行うことはできなかった。しかし、コンドンⅢ式やセルゲエエフカ式に伴う波状の隆起線文土器との関係も含めて、隆起線文土器に関する型式学的検討を進める必要がある。

王立新 (2018) は中国東北部地域の新石器前半期の土器編年を提示しているが、その中で後套木嘎Ⅱ期が隆起線文土器の時期に相当するようであるが、直線状の隆起線文土器が中心となり、波状の隆起線文土器は確認できない。また、鴨緑江流域や図們江流域においても波状の隆起線文土器は確認できない (楊 2013)。現状では波状の隆起線文土器が出現する可能性が最も高い地域は沿海地域南部である。モレーバによればボイスマン文化第 2 段階から波状の隆起線文土器が現れる (Морева 2005)。モレーバは広域的な視点からアムール中流域や嫩江流域における隆起線文土器との型式間交渉を想定している。ロシア極東や中国東北部を含めた中期新石器文化における集団間の交渉過程を考える上でも検討されるべき課題の一つである。

二点目は、本論のⅢ期から中期新石器時代後半期への移行に関する問題である。現在のところコンドンⅢ式からマルィシェボ式の間の 6100 ~ 5500BP における考古学文化については空白期間がある。かつて筆者は、押引波状文系土器を後期コンドン式土器の菱形型押文系統に位置づけて、マルィシェボ式の開始と考えた (内田 2013)。また、沿海地域では、モレーバによるボイスマン文化第 3 段階の窩文・隆起線文土器が沿海地域、アムール河中・下流域を含めた広範囲に分布するとされる (Морева 2005; Морева и Батаршев 2009)。しかし一方でマルィシェボ文化の広域分布を主張する意見もある (Шевкомуд 2009; Шевкомуд и Кузьмин 2009)。マルィシェボ式土器とボイスマン式土器の定義から見直す必要がある。

中期新石器文化前半期から後半期にかけては、地域間関係に大きな変化があるものと考えられている。後

半期には大規模な集落遺跡が明確になり、剥片石器が多用される状況等と合わせて、当該時期にはロシア極東地域・中国東北部地域を含めた大規模な地域的集団の再編が起きた可能性が指摘されている（大貫1998；2011）。この再編にいたるプロセスの背景を探ることも今後の課題の一つとなるだろう。

謝辞

本論をまとめるにあたり、故シェフコムード II. Я. 博士には、アムール河下流域での発掘調査や資料整理においてご指導・ご協力を得た。ウラジオストックやノボシビルスクでの資料調査を行う際にもロシア人研究者を紹介して下さるなど多方面にわたってご高配をいただいた。筆者の怠惰により本論を完成させるまでに時間を有してしまい、博士とコンドン文化に関する議論の続きができないままになってしまったことが悔やまれる。

福田正宏先生、森先一貴博士、國木田大先生には現地調査を通じて、本論の骨子を形成する上で多くの有益なご指摘・ご助言を得た。また、以下の諸先生、諸氏からも現地調査や資料見学、ロシア語文献収集において多くのご協力を得ました。記して感謝いたします（敬称略・五十音順）。

出穂雅実、大貫静夫、小野昭、熊木俊朗、グリシェンコ B. A.、クリューエフ H. A.、ゴルシュコフ M. B.、佐藤宏之、ジコバ O. B.、張恩恵、瀧千穂、ドロフェバ H. A.、中澤寛将、夏木大吾、長沼正樹、橋詰潤、バタルシェフ C. B.、ポポフ A. H.、メドベージェフ B. E.、モレーバ O. Л.、ヤンシナ O. B.、ワシリエフスキー A. A.

註

- 1) 本論で初出のロシア語については日本語表記の後にロシア語を記した。ロシア語表記の内、「文化」、「型式」、「地域」、「都市」名はロシア語形容詞を、「遺跡」、「人物」、「技術」、「土器の文様」名にはロシア語名詞を記載した。なお、同一遺跡・同一人名であっても、論者・訳者によって日本語表記に一致をみないことがあるが、引用文献の提示では各原典に即して記している。
- 2) 内田 2011b では、櫛歯土器を「マリインスコエ類型」として取り扱った。前稿ではアムール河下流域全域を対象とした新石器文化編年を検討したため、アムール北東部における櫛歯土器の系統性を重視してこの名称を与えた。しかし、本名称はコンドン文化とマリインスコエ文化の各文化における櫛歯土器を別のものとして区別することにもなりかねず、定義的にも余計な混乱を招きかねないので、本論では使用しないことにする。将来的にアムール河下流域においてマリインスコエ文化の単一遺跡が確認され、型式学的な検討が可能となった際に、あらためて本文化については言及することにしたい。
- 3) もちろん自然層位や人工層位に基づいて各遺跡の出土資料を、丹念に検討すれば、型式学的な時間的序列を与えることは可能かもしれない。しかし、ロシア極東地域の考古学研究では、資

料を掲載する報告書が公にされないため第三者による検討が難しい。報告書に関する位置づけが日本考古学とは相当異なるため、ロシア極東地域の資料を扱う際には、その多くが断片的な概報や遺跡を調査した研究者による論文からその内容を判断するしかない。

- 4) 内田 2011a では 3a 種：楕円形状の刺突文が押捺によって施文されるものとした。その後土器を再検討した結果、4 単位一組の櫛歯であることを確認したことから、ここで訂正しておく。
- 5) 内田 2011a・b では、「櫛歯条線文」としたが、用語として条線文と紛らわしいため、本論では線状の櫛歯文に訂正して使用する。
- 6) 波状隆起線文土器については、内田 2011b では口縁部文様帯を中心に施文されていることを重視して、KnV1 ~ KnV2 式の前期コンドン文化に相当するものとした。しかし、口縁部文様帯への施文を想定しても本論のコンドン II a 式や II b 式に相当する段階には波状の隆起線文だけでなく、隆起線文土器そのものを確認することができないことや、コンドン遺跡第 8 号住居の出土状況から判断して、後期コンドン文化に帰属するものとして捉えるべきであろう。後述する沿海地域のルドナヤ文化の中でも隆起線文は後出の要素であることから、波状の隆起線文土器に関する前稿の分類を訂正しておきたい。
- 7) コンドン地区遺跡群は、多くの考古学者たちによってこれまで何度も考古学調査が行われてきたため、調査者によって様々な遺跡名称が付されてきた経緯がある。そのため、ハバロフスク地方文化局が遺跡保護の観点から、名称を統一している（Шиповалов2014）。コンドン 60 遺跡は旧コンドン郵便局（Кондон-Почта）遺跡である。
- 8) 原文では、シチュー鍋形（ситулообразной форм）となる。
- 9) シエクリヤエボ文化は、「ハンカ新石器文化」、「ルドナヤ文化遺跡のハンカ地域グループ」、「セルゲエエフカタイプの遺跡」、「ペトロビッチーシロチンカタイプの遺跡」などと仮称されていた（Клюев и Гарковик2006）。
- 10) 将来的に新開流文化とベトカ文化を総合的に検討した際に総合的にその文化概念を検討することにしたい。

引用文献

（日本語）

- ア・ペ・オクラドニコフ 1975 「ゼーヤ川流域およびアムール中流域の考古学」『シベリア極東の考古学 1』岩本義男・大塚和義・中島寿雄・中村嘉男訳、河出書房新社、199-212
- アレクセイ・オクラドニコフ 1974 『シベリアの古代文化—アジア文化の—源流—』加藤九祚・加藤晋平訳、講談社
- 伊藤慎二 2005 「第 VI 章 総括」『東アジアにおける新石器文化と日本』Ⅱ：100-114
- 伊藤慎二 2006 「ロシア極東の新石器文化と北海道」『東アジアにおける新石器文化と日本』Ⅲ：59-94
- 内田和典 2011a 「クニャゼボルコンスコエ 1 遺跡の土器」『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 61-102
- 内田和典 2011b 「アムール下流域の新石器時代土器編年」『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 149-177
- 内田和典 2013 「極東東・南部地域の中期新石器土器型式研究—アムール下流域マリシェボ文化を中心に—」『北海道考古学』49：1-16

- 内田和典・國木田大・森先一貴 2018 「極東地域の土器出現期グロマトウーハ文化の年代」『第 20 回長野県旧石器研究交流会シンポジウム 種子柴系石器群とはなにか?』長野県旧石器文化研究交流会, 48
- 大貫静夫 1992a 「極東の先史文化」『季刊考古学』38 : 17-20
- 大貫静夫 1992b 「豆満江流域を中心とする日本海沿岸の極東平底土器」『先史考古学論集』2 : 47-78
- 大貫静夫 1998 『東北アジアの考古学』世界の考古学 9 同成社
- 大貫静夫 2010 「縄文文化と東北アジア」『縄文時代の考古学 1 : 縄文文化の輪郭』同成社, 141-153
- 大貫静夫 2011 「アムール編目土器の終焉と周縁」『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 243-264
- 大貫静夫・國木田大・吉田邦夫 2011 「極東北部新石器時代の変遷について—額拉蘇 C 遺跡採集土器の新たな測定年代から—」『第 12 回北アジア調査研究報告会発表要旨』同実行委員会 16-18
- 國木田大 2019 「第 4 章 土器付着物でわかる年代と食生活」小林謙一編『土器のはじまり』同成社 : 83-105
- 國木田大・I.Shevkomud・吉田邦夫 2011 「アムール下流域における新石器文化変遷の年代研究と食性分析」『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 201-242
- 國學院大学 21COE 第 I グループ考古学班 2004 『東アジアにおける新石器文化と日本』 I
- 國學院大学 21COE 第 I グループ考古学班 2005 『東アジアにおける新石器文化と日本』 II
- 福田正宏 2007 『極東ロシアの先史文化と北海道』北海道出版企画センター
- 福田正宏 2013 「日本列島北辺域における新石器—縄文時代の土器」『古代文化』65 (1), 21-41
- 福田正宏 2018 「縄文文化の北方適応」『国立歴史民俗博物館研究報告』208 : 9-44
- 福田正宏・シェフコムード I.Ya.・内田和典・熊木俊朗編 2011 『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 福田正宏・グリシェンコ, V・ワシレフスキー, A・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・國木田大・ペレグドフ, A・内田和典・森先一貴・役重みゆき・夏木大吾・山下優介 2015a 「サハリン中部アド・ティモボ遺跡群の考古学的調査 (2014 年度)」『第 16 回北アジア調査研究報告会発表要旨』 : 35-42
- 福田正宏・グリシェンコ V・ワシレフスキー A・大貫静夫・熊木俊朗・國木田大・森先一貴・佐藤宏之・モジャエフ A・パシエンツェフ P・ペレグドフ A・役重みゆき・夏木大吾・高鹿哲大 2015b 「サハリン新石器時代前期スラブナヤ 5 遺跡の発掘調査報告」『東京大学考古学研究室紀要』29 : 121-146
- ヤンシナ O.V.・ゴルブノフ S.V.・クズミン Ya.V. 2012 「サハリン新石器時代前期に関する諸問題—アド・ティモボ 2 遺跡—」福田正宏訳『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容 (1)』東京大学常呂実習施設研究報告 10, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 10-26 (原著 : Яншина О. В., Горбунов С. А., Кузьмин Я. В. 2012 К вопросу о раннем неолите Сахалина: стоянка Адо-Тымово-2. *Россия и АТР*. 2012 (2) : 31-49.)
- (ロシア語)
- Батаршев, С. В. 2009 *Руднинская археологическая культура в Приморье*. ООО «Рея».
- Батаршев, С. В., Дорофеева, Н. А., Морева, О. Л. 2010 Пластинчатые комплексы в неолите Приморья (генезис, хронология, культурная интерпретация). *Приоткрывая завесу тысячелетий: к 80-летию Жанны Васильевны Андреевой*: 102-156.
- Грищенко, В. А. 2011 *Ранний неолит острова Сахалин*. СахГУ.
- Грищенко В.А. 2018 *Леворучинский комплекс ранней фазы среднего неолита острова Сахалин. Раскопки поселения Левый ручей 2, пункт 2 в 2011 году, раскоп № 2*. СахГУ.
- Грищенко В. А., Фукуда М, Василевский А. А., Онуки Ш, Сато Х, Куникита Д, Кумаки Т, Можаяев А. В., Перегудов А. С., Пашенцев П. А., Учида К., Морисаки К, Якушиге М, Нацуки Д, Ямашита Ю. 2017 Новые исследования поселения Адо-тымово-2 (результаты работ совместной российско-японской экспедиции 2014, 2015 гг.). *Археология CIRCUM-PACIFIC: памяти Игоря Яковлевича Шевкомуда*. Тихоокеанское: 136-142.
- Деревянко, А. П. 1973 *Ранний железный век Приамурья*. Наука
- Деревянко, А.П., Богданов, Е.С., Нестеров, С.П. 1999 *Могильник Найфельд*. ИАЭТ СО РАН.
- Деревянко, А. П., Чо Ю-Джон, Медведев, В. Е., Юн Кын-Ил, Хон Хён-У, Чжун Сук-Бэ, Краминцев, В. А., Медведева, О. С., Филатова, И. В. 2002 Исследования Российско-Корейской археологической экспедиции в долине нижнего Амура в 2002 г. Исследования на острове Сучу в Нижнем Приамурье в 2001 г. *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий* 3:76-83.
- Деревянко, А. П., Чо Ю-Джон, Медведев, В. Е., Шин Чан-Су, Хон Хён-У, Краминцев, В. А., Медведева, О. С., Филатова, И. В. 2003 *Неолитические поселения в низовьях амура (отчет о полевых исследованиях на острове Сучу в 1999 и 2002 гг.)*. ГИИKN РК-ИАЭТ СО РАН.
- Деревянко, А. П., Деревянко, Е. И., Нестеров, С. П., Табарев, А.В., Учида К, Куникита Д, Морисаки К, Мацудзаки Х. 2017 Новые радиоуглеродные этапы неолита в Западном Приамурье. *Археология, этнография и антропология*. 45 (4) :3-12.
- Дьяков, В. И. 1992 *Многослойное поселение рудная пристань и периодизация неолитических культур Приморья*. Дальнаука.
- Клюев Н. А., Яншина О. В., Кононенко Н. А. 2003 *Поселение Шекляево-7 –Новый Неолитический Памятник в Приморье. Россия и АТР* 4 (42) :5-15.
- Клюев Н. А., Гарковик А. В. 2006 К вопросу о культурной принадлежности неолитического комплекса памятника Дворянка-1 в Приморье. *Россия и АТР* 1 (51) :82-88.
- Клюев Н. А., Гарковик А. В. 2008 Новые данные о неолите приморья (по материалам исследований 2000-х годов). *Неолит и неолитизация бассейна Японского моря*, С.85-97, Владивосток.
- Конопацкий, А. К. 1990 *Керамика эпохи неолита в памятнике Сусанино-4 (Нижний Амур)*. *Древняя керамика Сибири*, С.9-18, Новосибирск.
- Лынша, В. А., Тарасенко, В. Н. 2015 *Проблемы археологической*

- типологии и выделения культур в Приморье в свете новейших исследований в долине р. Иман (Красноармейский район) . *Первобытная археология Дальнего Востока России и смежных территорий Восточной Азии*, С.32-62, Владивосток
- Малявин, А. В. 2008 Харпичан-4: Многослойный неолитический памятник (Приамурье) . *Окно в неведомый мир*, С.150-155, Новосибирск.
- Медведев В.Е. 2005 Неолитические культуры Нижнего Приамурья. *Российский Дальний Восток в древности и средневековье: открытия, проблемы, гипотезы*, С.234–267, Владивосток.
- Медведев, В. Е. 2008 Мариинская культура и ее место в неолите Дальнего Востока. *Всероссийского археологического съезда. Труды II (XVII) I*, С.244-248, ИА РАН.
- Медведев, В. Е., Филатова, И. В. 2002 К характеристике орнамента неолитической керамики Вознесенского поселения. *Археология и культурная антропология Дальнего Востока и Центральной Азии*, С.42-56, Владивосток.
- Морева, О. Л. 2003 Относительная периодизация керамических комплексов бойсманской археологической культуры памятника Бойсмана-2. *Проблемы археологии и палеоэкологии Северной, Восточной, и Центральной Азии*, С.172-175, Новосибирск.
- Морева, О. Л. 2005 *Керамика Бойсманской Культуры (по материалам памятника Бойсмана-2)* . Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. ДГУ.
- Морева, О. Л., Попов А. Н. 2003 Культурная принадлежность остродонной керамики Бойсмана-2. *Проблемы археологии и палеоэкологии Северной, Восточной, и Центральной Азии*, С.176-179, Новосибирск.
- Морева О. Л., Батаршев, С. В., Попов, А. Н. 2008 Керамический комплекс эпохи неолита с многослойного памятника Ветка-2 (Приморье) . *Неолит неолитизация бассейна Японского моря: человек и исторический ландшафт*, С.131-160, Владивосток.
- Морева, О. Л., Батаршев, С.В. 2009 Культурные контакты в неолите приморья и приамурья (по результатам исследования керамики) . *Культурная хронология и другие проблемы в исследованиях древностей Восток Азии*, С.147-152, Хабаровск.
- Окладников А. П. 1970 Неолит Сибири и Дальнего Востока. *Каменный век на территории СССР*, С.172-193, Наука.
- Окладников, А. П. 1972 Отчет о раскопках древнего поселения у сел а Вознесенского на Амуре, 1966 г. *Материалы по археологии Сибири и Дальнего Восток I* , С.3-35, Новосибирск.
- Окладников, А. П. 1983 *Древнее поселение Кондон (Приамурье)* . Наука.
- Окладников, А. П. 1984 Керамика древнего поселения Кондон (Приамурье) . Наука.
- Окладников, А. П., Деревянко, А. П. 1973 *Далекое прошлое Приморья и приамурья*. Дальневост. книжн. изд-во.
- Окладников, А. П., Деревянко, А. П. 1977 *Громатухинская культура*. Наука.
- Попов, А. Н., Морева, О. Л., Батаршев, С. В., Дорофеева, Н. А. 2005 Новые материалы по неолиту Восточного Приморья (результаты исследований 2005 года) . *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий XI*, С.184-189. Новосибирск.
- Филатова И. В. 2008 *Орнаментальные традиции Нижнеамурского неолита*. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. ИИАЭт СО РАН.
- Цетлин Ю.Б., Медведев В.Е. 2014 Керамика мариинской культуры. *Археология, этнография, антропология Евразии*. 4 (60) : 43-53.
- Цетлин Ю.Б., Медведев В.Е. 2017 Новые результаты изучения керамики поселений начального и раннего неолита Казакевичево и Сучу в Приамурье. *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий XXIII*, С.226-230, Издательство ИАЭТ СО РАН.
- Шевкомуд И. Я. 2003 Кондонская неолитическая культура на Нижнем Амуре: Общий обзор. *Проблемы археологии и палеоэкологии Северной, Восточной, и Центральной Азии*, С.214-218. ИАЭт СО РАН.
- Шевкомуд, И. Я. 2004 Поздний Неолит Нижнего Амура. ДВО РАН.
- Шевкомуд, И. Я. 2005 Хронология культур эпохи камня в Восточном Приамурье 『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅱ』: 185-214
- Шевкомуд И. Я. 2009 Средний неолит Нижнего Приамурья (общий обзор) . *От Монголии до Приморья и Сахалина*, С.17-41. Владивосток.
- Шевкомуд, И. Я., Кузьмин, Я. В. 2009 Хронология каменного века Нижнего Приамурья (Дальний Восток России) . *Культурная хронология и другие проблемы в исследованиях древностей Восток Азии*, С.7-46, Хабаровск.
- Шиповалов А. М. 2014 История исследований эворон-горинского георхеологического района. 『環日本海北回廊の考古学的研究 (I)』: 117-140 (英語)
- Kuzmin Y.V., Jull A.J.T, Orlova L.A., Sulerzhitsky L.D. 1998 14C Chronology of the Stone Age Cultures, Russian Far East. *Radiocarbon* 40 (2) :675-686.
- Morisaki, K. and Sato, H. 2015 Hunter-Gatherer Responses to Abrupt Environmental Change from the Terminal Pleistoceneto the Early Holocene in the Lower Amur Region. In: Sandra SÁZELOVÁ, Martin NOVÁK and Alena MIZEROVÁ (eds.) . *Forgotten Times and Spaces: New Perspectives in Paleoanthropological, Paleoenvironmental and Archaeological Studies*, pp.418-434, Masaryk University.
- Popov A.N. 2008 Early and middle neolithic of the south of the Far East Russia 『環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動』 総合地球環境学研究所・研究プロジェクト「日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討」サハリン・沿海州班, 95-105 (中国語)
- 黑龙江省文物考古工作队 1979 「密山县新开流遗址」『考古学报』1979 (4) : 491-517
- 王海燕、张立玫 2003 「黑龙江省同江市街津口遗址调查报告」『北方文物』2003 (1) : 1-5

- 王立新 2018「后套木嘎新石器時代遺存及相关問題研究」『考古学报』
2018 (2) : 141-164
杨永才 2016「黑龙江饶河县渔丰南城址发现的新石器时代文化遗存」
『北方文物』2016 (2) : 12-16
杨占风 2013『鴨綠江図們江及烏蘇里江流域新石器文化研究』文物
出版社

挿図出典

図 1 : 福田 2018 表 1 を基に筆者作成。図 2・3・11 : 筆者作成。
図 4-1 ~ 11 : クニヤゼボルコンスコエ 1 遺跡 (福田他 2011・
fig.58-11、58-36、58-25、55-1、55-2、55-3、55-4、44-15、44-
12、44-13、44-14)。図 5-1・2・3・4・6・7・8・10・11 : クニヤ
ゼボルコンスコエ 1 遺跡 (福田他 2011・fig.49-2、31-1、47-6、
47-7、43-32、43-33、44-19、50-8、38-5)、図 5-5 : マラヤガバ
ニ遺跡 2007 年度 (福田他 2011・fig.18-15)、図 5-9 : マラヤガバ
ニ遺跡 2008 年度 (内田 2011b・fig.3-35)。図 6-1・4・5・6・7・
8・9・10・11 : クニヤゼボルコンスコエ 1 遺跡 (福田他 2011・
fig.31-2、38-4、38-1、49-1、43-20、43-25、49-3、38-2、56-
20)、図 6-2・3 : ハルピチャン 4 遺跡 (Малявин 2008・Рис.2-5・
7 を筆者再トレース)、図 6-12 : マラヤガバニ遺跡 2007 年度 (福
田他 2011・fig.18-20)。図 7-1・2・7 : マラヤガバニ遺跡 2008 年
度 (内田 2011b・fig.3-76、66、71)、図 7-3 : コンドン遺跡第 10
号住居址床面 (Окладников 1984・табл.LX. 4)、図 7-4 : マラヤ
ガバニ遺跡 2007 年度 (福田他 2011・fig.14-1)、図 7-5・9・10・
11・14・16・17・19 : コンドン郵便局遺跡 (Филатова 2008・
Рис.54-10、53-1、53-2、54-6、43-3、51-4、51-6、43-4)、図
7-6・18 : コンドン遺跡第 2 号住居址 (Окладников 1984・табл.
XVI. 9 を筆者再トレース、табл.XVI. 5 を筆者再トレース)、図
7-8 : ボズネセンスコエ遺跡 (Медведев 他 2002・Рис.2-5)、図
7-12 : スサニノ 4 遺跡 (Конопацкий 1990・Рис.2)、図 7-13 : コ
ンドン遺跡第 9 号住居址 (Окладников 1984・табл.LII. 4 を筆者
再トレース)、図 7-15 : コンドン遺跡第 8 号住居址 (Окладников
1984・табл.LII. 5)。図 8-1 ~ 6・14・15・17・16・20 : ルザノバ・
ソプカ 2 遺跡 (Батаршев 2009・Рис.8-6、8-7、9-2、9-1、9-3、
9-4、4-4、7-8、4-3、7-1、8-1)、図 8-7 ~ 9・19・21 : ルドナヤ
プリスタニ遺跡 (Батаршев 2009・Рис.39-5・38-7・38-1、36、
41-6)、図 8-10 : オシノフカ遺跡 (國學院大 2004・II-15 図 1 の復
元図上部のみ)、図 8-11 : ウスチノフカ 8 遺跡 (國學院大 2005・
V-2 図 1a)、図 8-12・13・17・18 : ルドナヤプリスタニ遺跡 (Д
ьяков 1992・Рис.6-1、6-19)。図 9-1・2・3・8・10、9-15、9-18
~ 21 : シエクリヤエボ 7 遺跡 (Клюев 他 2003・Рис.4、Рис.5、
Рис.3)、図 9-4・5・6・7・9・11・17 : セルゲエフカ 1 遺跡 (Б
атаршев 2009・Рис.26-2、27-2、26-3、27-1、27-3、25-1、22-
1)、図 9-12・16 : ルドナヤプリスタニ遺跡 (Дьяков 1992・Рис.7-
5、Рис.7-6)、図 9-13・14 : ドボリャンカ 1 遺跡 (Клюев 他 2008・
табл.2-3・7)、図 10-1 ~ 12 : ベトカ 2 遺跡 (Морева 他 2008・
Рис.3-1、Рис.1-1、Рис.14、Рис.16、Рис.5、Рис.13、Рис.6-1、
Рис.7、Рис.12、Рис.2-2)、図 10-13・14 : マリヤクリイボルフ遺跡 (Б
атаршев 2009・Рис.30-1・2)。図 12-1・2 : アド・ティモバ 2 遺跡
(ヤンシナ他 2012・第 6 図 1、2 を筆者が再配置して再トレースし
た)、図 12-3・4・5 : (福田他 2015・第 6 図 1、第 5 図 1、第 6 図
12)、図 12-6 : (ヤンシナ他 2012・第 6 図 6)。図 13-1 : セルゲエ
フカ遺跡 (Окладников 他 1977・табл.94)、図 13-2・3 : グロマトウ
ハ遺跡 (Окладников 他 1977・табл.42・43)、図 13-4 : ノボボク
ロフカ遺跡 (Окладников 1975・第 71 図 4) 図 13-5 : ナイフェ
リド遺跡 (Деревянко 他 1999・Рис.42-1)、図 13-6 : 街津口遺跡 (王・

張 2003・図 3-1)

略号表記

- ГИИKN РК : Издательство Государственный Исследовательский
Институт Культурного Населения Республики Корея.
ДВО РАН : Дальневосточное отделение Российской академии
наук.
ДГУ : Дальневосточный государственный университет.
ИА РАН : Институт Археологии Российской Академии Наук.
ИИАЭт СО РАН : Институт Археологии и этнографии Сибир-
ского отделения Российской Академии Наук.
СахГУ : Сахалинский государственный университет.

Amur Net Pattern Pottery classification and distribution.

Kazunori UCHIDA

Neolithic period in Far East Russia, the culture using rhombus-shaped stamped pattern as an Amur Net Pattern pottery is widely distributed around the lower Amur River and Primorsky region around 7900 to 6100 BP. In this paper, I study focusing on this Amur Net Pattern pottery by the typology, organized the temporal parallel relationships between each region, and examined regional development. As a result, it was compared with the Phase I: Kondon type I and Rudnaya type, the Phase II: Kondon type II and Sergeevka type, and the Phase III: Kondon type III and Vetka type. Phase I: Kondon I type is mainly used the comb-tooth pattern, and Rudnaya type is mainly used the rhombus pattern. There are differences in the main patterns principles such as comb-toothed patterns and stamped patterns, but they have the same technique of imprinting. Phase II: It has more in common with the pattern composition and instrument surface adjustment technology than Phase I. The type subdivision is the existence of a section with a comb-tooth pattern that expands horizontally in a strip shaped pattern and a linear comb-tooth pattern. Phase III: In the Kondon III is composed by the combination of the embossed pattern and the comb tooth pattern. The Vetka type inherited the method of arranging the pattern band from the Sergeevka type.

The distribution of each period was examined mainly on Sakhalin Island and the middle Amur River basin, the Sanjiang Plain. On Sakhalin Island, embossed pottery is distributed only in the phase I, but after the phase II doesn't included in the distribution area of the Amur Net pattern pottery. In the middle Amur River basin, there is no data for Phase I, and it is difficult to assume a positive negotiation relationship between for Phases II and III. There are many unclear points about the Sanjiang Plain, but at the latest, it is included in the distribution area of Amur Net pattern pottery. In the future, it is necessary to solve the problems of (1) the relationship between Amur Net pattern pottery and the raised lined pottery distributed mainly in the middle Amur River basin and Nen River basin, and (2) the transition from the phase III to the latter half of the Middle Neolithic period.